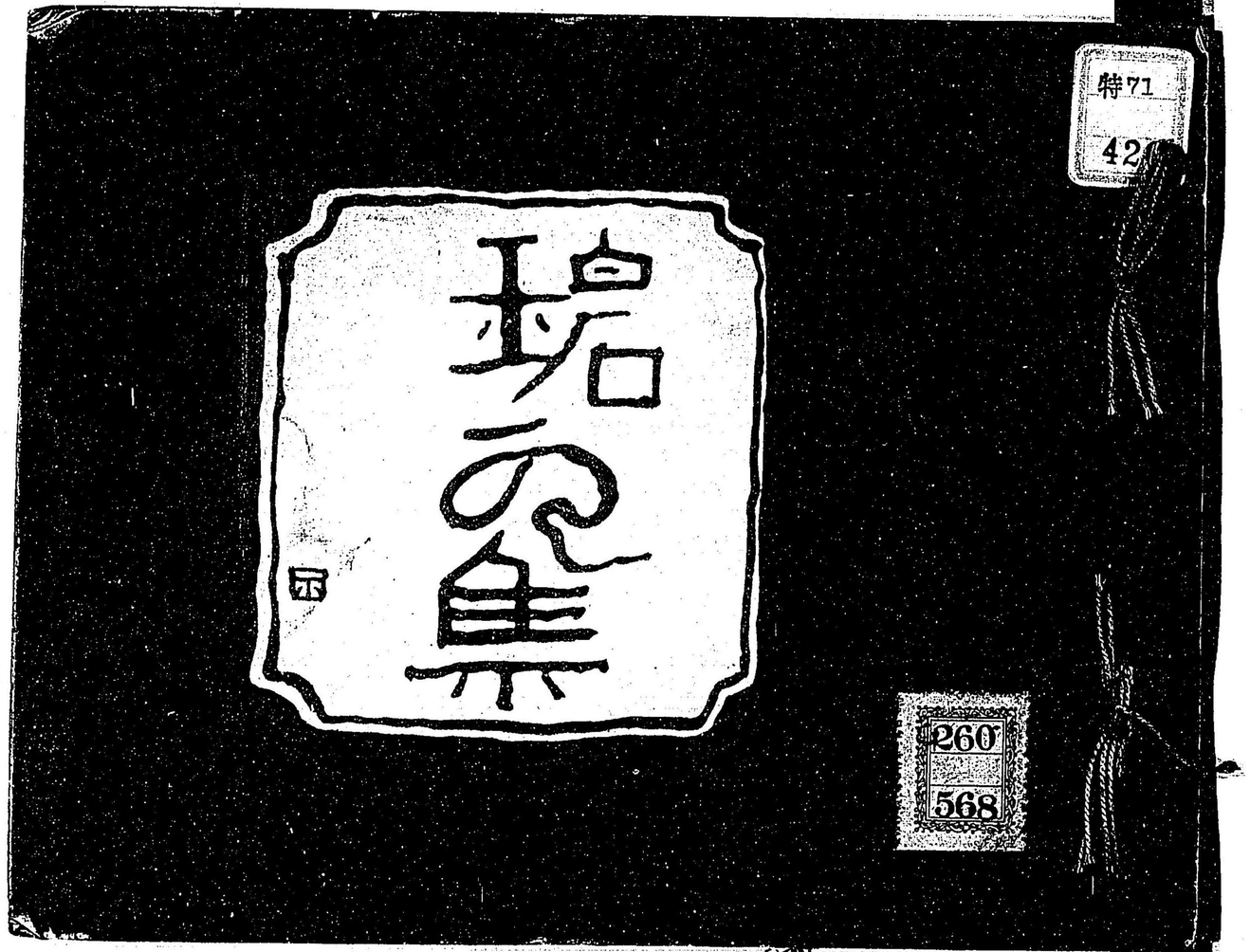


特71
420

260
568

087539-000-7

特71-420

碧雲集

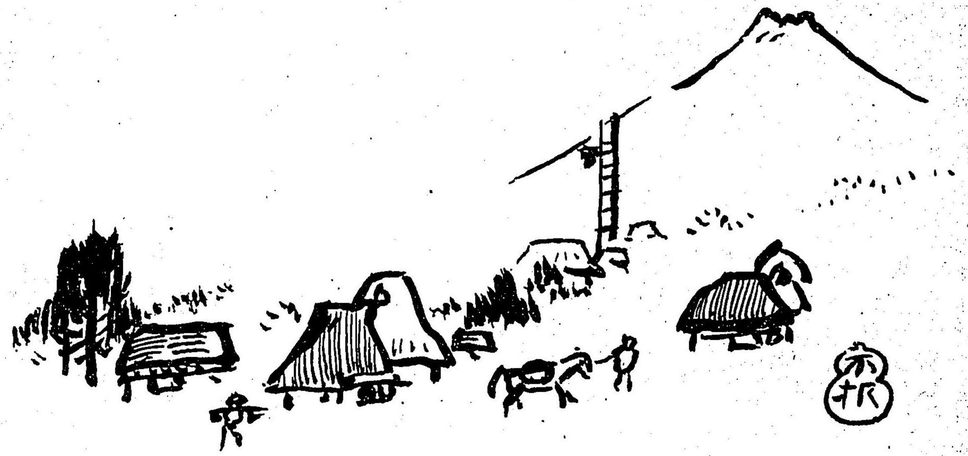
碧雲会／編

M42

DBE-0909

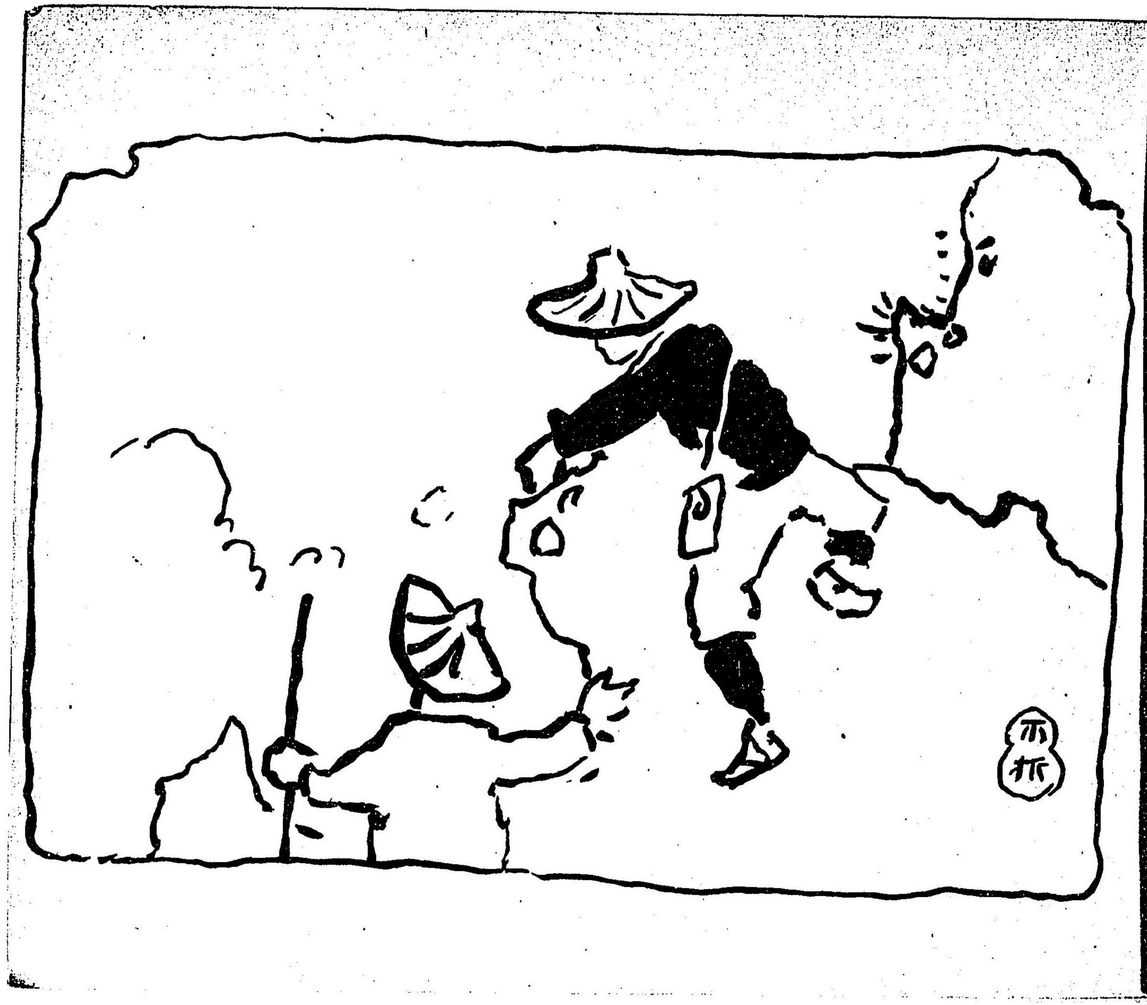
特71
420

明治
42 12 22
内交



あらぬ草
摘みしは
捨て蓮かな

続石



はしがき

一本句集は明治三十年秋、碧雲會創立當時より明治四十二年秋に至る十三箇年間、碧雲會幹事に於て發表したる松江日報、島根新報、山陰新聞及ひ俳誌草笛所載の作に就き選拔し、我地方俳壇の一記念として發刊するものなり。

一先輩諸氏の句、及び特に寄送ありし句を加へたる外、明治三十九年以後に係る松陽新報の松陽選句並に山陰日々新聞の日々俳壇、境俳壇の俳誌笹鳴所載の句も當該擔當幹事の希望により共に選拔採錄せり。

一採錄に就ては八重櫻、鐵笛、桐一葉、羽風、梧月共選し、更に桐一葉、羽風、梧月之を議選し、以て嚴正を期せりと雖、猶其失多々あるべきを恐る。

一本句集に於ける作者は出雲、石見、隱岐、伯耆、備前、備中、備後、四國、九州、三府其他各國に渉り、就中、中國其多數を占め四國之に亞げり。原作者は凡そ一千三百名、俳會百餘、原句數約二十万にして其中より採錄したる作者二百六十餘名、此句數二千二百餘句（新年八十餘句、春五百六十餘句、夏六百餘句、秋五百

六十餘句、冬四百六十餘句)なりとす。其作者名は之を附錄とせり。

一採錄句中陳套に屬するものあるは、本句集編纂の主旨に於て時代的選拔を標準の一としたるが爲めなり。

一雅號の別號、舊號等は編者に於て了知したる者及ひ特に通報ありしものは、之を現雅號に訂正せり。

一地方俳句界に緣故深き高濱虛子、碧雲會を指導せられたる大谷繞石両先生より特に題句を寄せられ、中村不折畵伯亦贈るに表紙題字並、俳畵數葉を以てせらる。映紫樓、佛丈、翠峰城、餘白、嘲水、神櫻、湘碧、村雨、矮松、牧星の諸氏は發行上多大なる援助を與へらる。玆に深く其厚志を謝す。

一本句集は去る明治三十八年より編纂に著手し、四十年に於て出版の豫定なりしが、原句數饒多にして意外の手數と日時とを要し、遂に所期に後るゝ事更に二箇年に及べり。同好の士之を諒せよ。

一今後の作句は、他日續碧雲集として發刊せん事を期す。

明治四十二年十二月

碧雲會幹事識

碧雲集目次

新年

天文

初日 一
御降 一
初東風 一

時候

元日 二
年の朝 二
初春 二

人事

飾 二
鍬初 二
喰積 六
書初 六
年男 六
帳綴 六
星佛 六
門松 六
舟乘初 六
書打 六
春駒 六
爆竹 七
買初 七
とんど 七
舞初 七
藏開 七
井戸開 七
手毬 七
納 七
餅初 七
若水 七
初爪 七
荷 七
始 七
歯朶 七
弓 七
骨 七
破魔弓 七
縁初 七
年賀 七
羽子 七
屠蘇 七
雑煮 七
遂 七
萬歳 七
夢 八
嫁が君 八
初鶏 八

動物

植物

春

福壽草 八
七草 八
若菜 八
陽炎 三
初雷 三
貝寄 三
麗 七
淺し 八
暖 八
春寒 八
閑 八
長月 八
二月寒 九
徐春 九
早 九
三月 九
盡 九

天文

霞 九
春の風 一〇
春の雨 一〇
春の雪 一一
雪解 一一
東風 一二
風光る 一三
春の霧 一三
春の日 一三
春の雪 一三
殘月 一三

地理

春の水 一三
春の山 一三
水温む 一四
春の海 一四
春の潮 一四
山笑ふ 一四
日永 一五
霾 一四
暮春 一六
冴返る 一七
夏近 一七
春の夜 一七

人事

紙雛 一九
鳶 一九
摩耶參 二〇
種物 二〇
汐干 二一
狩 二一
山焼 二一
桑摘 二二
菊根分 二二
踏青 二二
海苦 二三

動物

雉子 二五
雲雀 二六
鹿落角 二七
孕鹿 二七
鴛鴦 二七
燕 二七
春蝉 二七
蛇出穴 二三
鶴 二三
引鳥の巣 二三
鴨 二三
蛙 二三
鳥交る 二三
亀鳴く 二三
鳥 二三
雁風呂 二三
水 二三
曲 二三
蓮植 二三
畑打 二三
出代 二三
木の實植 二三
二日灸 二三
歸雁 二八
野遊 二三
蝶 二三
蜂 二三
摘草 二三
鶏合 二三
蜆 二九
泥 二九
田螺 二〇
薪能 二〇
若鮎 二〇
春惜む 二〇
鶯 二〇
絵踏 二〇
蛙 二〇
彼岸 二〇
虹 二〇
鮒 二〇
鰒 二〇
海雲 二〇
雀の子 二〇
白魚 二〇
百千鳥 二〇
釋奠 二〇
泊狩 二〇
寒食 二〇
猫の戀 二〇
櫻 二〇
桃 二〇
柳 二〇
椿 二〇
藤 二〇
梅 二〇
蹴鞠 二〇
馬酔木の花 二〇
山吹 二〇

植物

茶摘 二三
爐塞 二四
蛇出穴 二三
鶴 二三
引鳥の巣 二三
鴨 二三
蛙 二三
鳥交る 二三
亀鳴く 二三
鳥 二三
雁風呂 二三
水 二三
曲 二三
蓮植 二三
畑打 二三
出代 二三
木の實植 二三
二日灸 二三
歸雁 二八
野遊 二三
蝶 二三
蜂 二三
摘草 二三
鶏合 二三
蜆 二九
泥 二九
田螺 二〇
薪能 二〇
若鮎 二〇
春惜む 二〇
鶯 二〇
絵踏 二〇
蛙 二〇
彼岸 二〇
虹 二〇
鮒 二〇
海雲 二〇
雀の子 二〇
白魚 二〇
百千鳥 二〇
釋奠 二〇
泊狩 二〇
寒食 二〇
猫の戀 二〇
櫻 二〇
桃 二〇
柳 二〇
椿 二〇
藤 二〇
梅 二〇
蹴鞠 二〇
馬酔木の花 二〇
山吹 二〇

蘆の角 三九
辛夷 四〇
蓮の蕾 四〇
菜の花 四〇
土筆 四一
梨の花 四一
蘭 四一
獨活 四一
芹 四一
菩提柳 四一
川柳 四一
虎杖 四一
韭 四一
木の芽 四一
竹の秋 四一
若草 四一
海棠 四一
春の草 四一
蕗の薹 四一
卯の花下し 四一
銀杏の花 四一
豆の花 四一
菫 四一
李の花 四一
大根の花 四一

夏

雜

○

夏日 四九
虎か雨 四九
清水の川 四九
夏野の山 五〇
夏の田 五一
短夜 五一
涼 五二
暑 五二
五月 五三
秋近 五三
四月 五三
旱月 五三
卯月 五三

地理

時候

土用 五五
夏書 五五
夏行 五五
扇 五五
月晴 五五
五月闇 五五
盛 五五
日無月 五五
水無月 五五
鯉 五五
日傘 五五
沖胎 五五
蚊帳 五五
納涼 五五
田植 五五
川狩 五五
團扇 五五
舟遊 五五
蚊遣 五五
祭囃 五六
幟 五六
竹植 五六

人事

初夏 五六
雨乞 五六
火串 五六
安居 五六
水飯 五六
鵜飼 五六
竹婦人 五六
畫寐 五六
六月會 五六
川社 五六
氷室 五六
茶 五六
甘 五六
行水 五六
帷子 五六
施米 五六
風鈴 五六
水泳 五六
羅 五六
佛生會 五六
草合 五六
心太 五六
夏祓 五六
袷 五六
一夜酒 五六
田草取 五六
行水 五六
單衣 五六
氷賣 五六
藥 五六
摘 五六
川床 五六
掛香 五六
水 五六
菖蒲 五六
行 五六
菖蒲 五六
青簾 五六
花御堂 五六
晒布 五六
更衣 五六
編笠 五六
干 五六
虫 五六
竹

動物

時鳥 六六
閑古鳥 六八
蝙蝠 六八
螢 六九
鮎 六九
水鷄 七〇
雨蛙 七〇
金魚 七〇
蟬 七一
蟇 七一
蛇 七一
まひ〳〵 七一
羽蟻 七二
夏蟲 七二
毛蟲 七二
蚊 七二
行々子 七三
老鶯 七三
蜘蛛の子 七三
夏の蝶 七三
翡翠 七三
鹿の子 七三
蠅 七四
羽拔鳥 七四
蛞蝓 七四
蝸牛 七四
松魚 七四
水馬 七四
蟻 七四
蚯蚓出 七四

植物

若葉 七四
牡丹 七五
若竹 七六
桐の花 七六
蓮 七七
葵 七七
麻 七七
夏木立 七八
凌霄 七八
散松葉 七八
合歡の花 七八
晝顔 七八
麥 七九
棕櫚の花 七九
茨の花 七九
卯の花 七九
百合の花 七九
若楓 八〇
瓜 八〇
茂り 八〇
茄子 八〇
林檎 八〇
葉柳 八一
蓴菜 八一
木下闇 八一
紫陽花 八一
百日紅 八一
河骨 八一
餘花 八一
藻の花 八二
薔薇の花 八二
燕子花 八二
藜 八二
橘 八二
夕顔 八二
夏草 八二
筍 八二
早苗 八三
栗の花 八三
玉卷芭蕉 八三
鴨足草 八三
綿の花 八三

雜

雜 八三

○

秋

天文

秋の風 八五
秋の雨 八六
天の川 八七
霧 八七
月 八八
稻妻 八八
露 八九
後の月 九〇
野分 九〇
初嵐 九〇
星月夜 九〇
名月 九〇
秋日 九一

地理

初汐 九一
花野 九一
秋の水 九二
落し水 九二
秋の山 九二
秋の原 九二
秋の野 九二

時候

朝寒 九二、
秋の日 九三
冷か 九三
夜寒 九四
初秋 九四
漸寒 九四
夜長 九四
秋の夜 九四
新涼 九四
殘暑 九五
秋の暮 九五
暮秋 九五
冬近 九五
身に入む 九五
坐寒 九五
文月 九五
八月 九六
木染月 九六
九月盡 九六

人事

毛見 九六
草の市 九六

送火　九七
子規忌　九七
後の雛　九七
虫送　九七
掛煙草　九七
秋蚊帳　九七
夜學　九八
新酒　九八
廻燈籠　九八
砧　九八
藥掘　九八
天長節　九八
柚味噌　九八
施餓鬼　九九
花火　九九
牛蒡引　九九
魂祭　九九
攝待　九九
門茶　九九
鳴子　九九
星祭　九九
鯷漬　九九
どびろく　九九
添水　一〇〇
案山子　一〇〇
崩簗　一〇〇
衝突入　一〇〇
鬼貫忌　一〇〇
八朔　一〇〇
踊　一〇〇
相撲　一〇〇
秋惜む　一〇〇

動物

雁　一〇一
蜻蛉　一〇二
蜩　一〇三
渡鳥　一〇三
百舌鳥　一〇四
鹿　一〇四
蟲　一〇四
鶉　一〇五
鴫　一〇五
蟷螂　一〇五
螽　一〇五
歸燕　一〇五
竈馬　一〇六
馬追　一〇五
鶺鴒　一〇六
鯔　一〇六
落鮎　一〇六
雀爲蛤　一〇六
蟋蟀　一〇七
簑虫　一〇七
蛇入穴　一〇七
鱸　一〇七
目白　一〇七
太刀魚　一〇七
絡線虫　一〇七
啄木鳥　一〇七
鰯　一〇七
沙魚　一〇七
秋の蝶　一〇七
河鹿　一〇八
椋鳥　一〇八

植物

芒　一〇八
紅葉　一〇九
菊　一一〇
木槿　一一一
芋　一一二
黍　一一二
萩の花　一一三
柿　一一三
芭蕉　一一四
鷄頭　一一四
散柳　一一五
荻　一一五
蕎麥の花　一一五
瓢　一一六
末枯　一一六
南瓜　一一六
芙蓉　一一六
草の花　一一七
綿　一一七
栗　一一七
蔦　一一七
落穗　一一八
蘭の花　一一八
棗　一一八
糸瓜　一一八
薏苡　一一八
蓼の花　一一八
秋の草　一一九
木の實　一一九
蕃椒　一一九
茸　一一九
朝顔　一一九
女郎花　一一九
粟　一一九
木犀　一一九
鬼灯　一一九
鳳仙花　一一九
龍膽　一二〇
草紅葉　一二〇
銀杏　一二〇
新米　一二〇
西瓜　一二〇
蘆の花　一二〇
稻　一二〇
桔梗　一二〇

冬

天文

雪　一二一
凩　一二二
霰　一二三
時雨　一二三
霜　一二四
冬日　一二四
霙　一二四
冬の月　一二五
北風　一二五
寒月　一二五
冬の雨　一二五

地理

氷　一二六
枯野　一二六
冬の川　一二七

冬田 三七
水涸る 三七
山眠る 三七
冬の山 三七
冬の海 三八

時候

小春 三八
寒さ 三九
寒晴 三九
短日 三九
冴ゆ 三九
冬の夜 三九
冬至 三九
春近 三九
冬の日 三九
初冬 三九
凍る 三九
大晦日 三九
十月 三九
凍つ 三九

人事

榾 三九
埋火 三九
滿團 三九
炬燵 三九
湯婆 三九
網代 三九
柊挿す 三九
籠 三九
掃 三九
十夜 三九
納豆 三九
炭 三九
鍛冶 三九
卷 三九
鉢 三九
十夜 三九
火鉢 三九
年籠 三九
狩 三九
年賀 三九
麥湯 三八

鉢叩 三八
足袋 三八
玄猪 三八
鯛味噌 三八
卵酒 三八
冬構 三九
春待 三九
神の留守 三九
避寒 三九
神の旅 三九
狸 三九
汁 三九
衾 三九
懷爐 三九
刈 三九
麥 三九
掃 三九
爐 三九
神祭 三九
聲 三九
寒 三九
厄拂 三九
紙衣 三九
千菜 三九
札納 三九
年忘 三九
火事 三九
熊突 三九
口切 三九
年の市 三九

べつたら市 三四
蕪村忌 三四
牡蠣 三五
石蕗の花 三四
煮凍 三四
鳴 三五
枯 三五
雪 三四
舟 三四
鯨 三五
麥蒔 三四
年送る 三四

動物

狼 三五
枯芝 三四
千鳥 三四
冬木 三四
河豚 三四
枯菊 三四
水鳥 三四
枇杷の花 三四
烏 三五
蕪 三五
鴨 三五
冬の菊 三四
鴛鴦 三五
枯蘆 三四
鮟鱇 三四
枯柳 三四
鰤 三四
枯茨 三四
さゝ鳴 三四
水仙 三四
冬の蠅 三四
枯木 三四
鶺鴒 三四
山茶花 三四
木兎 三四
茶の花 三四
海鼠 三四

植物

落葉 三五
返花 三四
冬木 三四
枯菊 三四
枇杷の花 三四
蕪 三四
冬の菊 三四
枯蘆 三四
枯柳 三四
枯茨 三四
水仙 三四
枯木 三四
山茶花 三四
茶の花 三四
八手の花 三四
枯芝 三四
石蕗の花 三四
枯蔦 三四
葱 三五
枯芒 三五

○

雜 三五

碧雲集目次終

附錄

作者一覽 三五

碧雲集

碧雲會編纂

新年之部

天文

初日　巖窟を脱け出る潮に初日かな　映紫樓
　　瑤臺の帷の花に初日かな　梧月
御降　御降や古き都の物靜か　曲村
初東風　初東風や一打祝ふ鯛の網　八重櫻

時候

元日　元日や松の宮居の白衣人　八重櫻

年の朝　雪の山雪の家年明けにけり　梧月

初春　年を織ぐ俳三昧や庵の春　碧梧桐

人事

飾　家々の飾に風や大手筋　梧月

輪飾をかけて參宮列車かな　同

飾臼四つ杵掛けて祝ひけり　碧梧桐

大飾ふさと垂れつゝ風もなし　鳴雪

輪飾や箱根の宿の休め駕籠　天泉

三重ねの本箱うれし注連飾　八重櫻

鍬初　羽織著て草鞋穿ちぬ鍬始　八重櫻

鍬始妻は織初する日かな　同

打ち初めし鍬の深さや裏の畑　同

果樹園に植ゑ足す桃や鍬始　同

醉顔に飛ぶ塊や鍬始　香骨

書初　書初や佳墨を磨りて春の頌　江村

腹中の第一句かな筆始　泰山

發句詠みの賣炭翁や筆始　八重櫻

書初の唐紙に上る蚤かな　梧月

帳綴　御帳綴掛けの殘りは捨てにけり　八重櫻

宵かけて美しき灯や御帳綴　同

帳綴や問屋が駄日記濱日記　神櫻

出を知つて入るを謀るや御帳綴　十峰

門松　門松や御濠に臨む一構　天泉

門松や波あたゝかき濱社　八重櫻

濱館門松に波寄するなり　梧月

蕎打　塗盆に水のたまりし蕎かな　五尺

板の間に畏まりけり蕎打　梧月

蕎打つやかた〳〵板間がた〳〵と　同

爆竹、とんど

爆竹の煙こめたり浦十戸　竹堂
とんどする城見暖の煙かな　八重櫻
齒朶の灰高きに上るとんど哉　梧月

舞初

雪晴れて廣間明けたり舞始　八重櫻
舞初や錦の古色なつかしむ　同
舞初の衣裝に絶にぬ美人哉　同

藏開

こぼれ米撒きたる如し藏開　八重櫻
大藩の金鳴る藏よ開初　同
鏘然と鍵鳴らしけり藏開　鯉洲

手毬

手毬唄几董が眠さましけり　禾水
簪の房が眉打つ手毬かな　水紫
手毬つくや蝶々髷の高さまで　八重櫻

初荷

しら〳〵と旗に明け行く初荷かな　螢雪
ゆた〳〵と垂るゝ帆綱や初荷船　魚鱗
漕き連るゝ初荷の舟や旗の風　十峰

若水

若水や逆鋒思ふ釣瓶竿　水人
若水を汲む上羽音落しけり　春山

齒朶

齒朶の葉に神鏡深き光りかな　村家
併に敷く齒朶の乾きも七日かな　羽風

初詣

注連高き鳥居くぐるや初詣　凍泉
よき衣に松の雫や初詣　乙羽

網曳

網曳や太皷据ゑたる寺の門　蝶羽
暫くは曳き合ふ網のすはり哉　梧月

破魔弓

破魔弓やよき子よき名の八郎太　八重櫻
破魔弓に挫ぎし鬼も出ぬ世かな　梧月

縫初

縫初のふくら雀や小雜巾　十峰
針箱に飾る蜜柑や縫初　羽風

年賀

喪にありて賀客來らず梅白し　羽風

羽子

羽子板の似顔に語る戀もあり　ゆかり

屠蘇	折紙の鶴舞ふ下や屠蘇を酌む	八重櫻
雑煮	雪掻くや稍過したる雑煮腹	稻心
蓬萊	蓬萊を捧げて女美しき	穀雨
萬歳	萬歳の烏帽子に觸れぬ凧の糸	蝶羽
初夢	初夢や群鶴の中に我もあり	八重櫻
喰積	喰積や喰草臥の寐草臥	映紫樓
年男	年男井戸端の氷踏み鳴らす	虹陽
星佛	灯に光る壁の砂子や星佛	桐一葉
舟乘初	鋭拔く舟乘初の波止場かな	八重櫻
春駒	春駒や江を渡り來て美男村	八重櫻

買初	買初の水大瓶に溢れけり	佛丈
諸初	村深く舊家の諸初めかな	八重櫻
井戸開	裏白に霜且つ白し井戸開	笨堂
松納	浦の戸の波白き日や松納	八重櫻
鋤初	鋤始の烏帽子にかゝる埃かな	梧月
弓始	霜白き庭の焚火や弓始	八重櫻
初凧	初凧のへな〳〵と上り下りかな	映紫樓
骨牌	梅の組柳の組や歌かるた	八重櫻

動物

嫁が君	蓬萊の熨斗動かすや嫁か君	潮月

初鶏　初鶏や見にかゝりたる山の形　桐一葉

植物

福壽草　病室の湯婆の側や福壽草　八重櫻
福壽草安東縣の大舗かな　同
福壽草稻佐の濱の砂敷きぬ　梧月

七草　七草や寺に隣りて家貧し　嘲水

若菜　磯畑や若菜の中の妹脊貝　禾水

春之部

天文

霞

跳への鍬鍛冶訪ふや草霞む　十峰
矢の根堀る人の動ぎや草霞む　同
塔上の誰が聲落つる霞かな　魚鱗
撫養からの紀州渡りや夕霞　同
筏士の欠伸より江の霞かな　柳風
坂長く霞の村へ下りけり　同
巨刹松杉の境高くして霞かな　八重櫻
船脚に魔がつく海の霞かな　同

能樂望月

橋がゝり霞の旅の母子かな　井泉水
舟に見る彦根の城の霞かな　繞石
夕には京に入る日の霞かな　二水
水郷に網列ね干す霞かな　翠影
霞む江や柳の上へ日出づる　ゐの兒
山塞の松空に舞ふ霞かな　里靜

松島の松に柳引く霞かな　峰嵐
霞む沖網ひく舟の配りかな　木風

春の風

橋の人さでに助言や春の風　八重櫻
春風や日本を見に蒙古王　同
春風や大樹の下の夢語り　同
春風や河原長者の物櫓　同
草の戸や鼠の留守の春の風　同
弟子得て假に庵りぬ春の風　坡酔
句一揆も起る天下や春の風　同
縫ふて居る衣を吹くや春の風　曙
出船に投げ言傳や春の風　水紫

春の雨

春雨や傘さして菊之丞　船山
筏土の短き簑や春の雨　嶺洞
角落ちし鹿の額や春の雨　ゐの兒
春雨の機場の塀にざれ繪かな　水聲
春雨や傘さして送り膳　柳風

栗林公園東海道五十三次を模す

富士見ゐて瀬田の大橋春の風　松濤樓
犬の子の額に泥や春の雨　梧月

春の雪

牽き出す名馬や芝の春の雪　湘碧
春の雪南天の葉に消ゐにけり　酔芳
白山を負へる小村や春の雪　活林

映紫樓に寄す

春の雪寸積むといふや燭の下　碧梧桐
温泉の町の親橋子橋春の雪　諷軒
春雪や都大路の惣賣　小坡
穂の床差木の床や春の雪　魚鱗

雪解

せめ肥も株古り桑や雪解畑　八重櫻
炭坑や午時の笛鳴る雪解風　同
枝なよて起きも直らぬ雪解かな　同
くたれ葉の重なり合ひし雪解かな　同
雪解や身延詣の下り舟　羅月

東風

滋淺く寄藻に東風の渡るなり　八重櫻
東風渡る吳の港や蟻　同
飛び初めし鯩に東風吹く野川かな　同
東風吹くや灣を壓して軍艦　諷軒
東風吹いて五島の漁も見ゐ初めぬ　羽風

風光る

築城も七分の空や風光る　八重櫻
熊坂が餉の顔や風光る　同
風光る江のほとりなり新在家　同
大木の枯れたる伐りぬ風光る　四京
名山の凹みの雪や風光る　綠葉

春の露

朝燒や園の名草に春の露　梧月
石蕗の芽や窃かに春の露たまる　同
春の露何の木の芽か紫に　雪の舍

春の日

染糸の庭木に乾く春日かな　村家
瑞光山
春の日や山の影踏む堂の椽　八重櫻

殘雪

殘雪や山陰道の國境　八重櫻
倒れ木に敗かれ殘りの雪白し　同

春の月

宮島や鳥居の上の春の月　三角堂
春月や負ひ行く樽の酒が鳴る　佛丈

陽炎

陽炎や草這ふ虫の髭長し　郭公樓
陽炎や藕根上げたる岸の草　梧月

初雷

初雷や八幡を戻る籔の上　十峰

貝寄

貝寄の波に醉ふたるひらめかな　水人

地理

春の水

一の堰二の堰春の水溢る　八重櫻
春水を渉りつるゝも皆舊知　同
手拭で目高すくふや春の水　蝶羽
板橋を渡れば春の水動く　村雨
春の水近江の山の映りけり　桐一葉
足袋ぬいで春の水踏む芝の中　羽風
春水や木屑流るゝ橋普請　梧月

春の山

片側は畑となりぬ春の山　八重櫻
春の山どこが頂國境　同
鞍形の春の山ある磯邊かな　同

横たはる船や港の春の山　同
韮に似て花咲く草や春の山　同

水温む

龜浮いて小川の水の温みけり　堇水
音立つる生簀の魚や水温む　活林

春の海

住吉へ奉納の船や春の海　村雨
童や尻まで這入る春の海　梧月

春の潮

岩の上に松あり春の潮滿ちぬ　薔薇

山笑ふ

興謝の海麗し丹波の山笑ふ　梧月

時候

朧

山塞を女の逃げし朧かな　八重櫻
立て白の化けても出でず朧かな　同
中低き野を越す道の朧かな　同
表坂朧に見ゆる木立かな　同
飯なく朧の庭の盥かな　同

夜陋を河伯の引きし朧かな　同
沼よりも里窪き野の朧かな　同
此海に海月の殖ゐる朧かな　同
朧夜や流れも出でぬ湖の水　虚子
大船の錨投ずる朧かな　里靜
忘れたる酒旗下ろす戸の朧なり　松濤樓
艫に見る舳の人の朧かな　玉流
沓をめすに左右の雪洞朧かな　六花
ごぼ〳〵と淵の水鳴ろ朧かな　衣沙櫻
灯の客ある樣に朧なり　蛙聲
躓けば狐狸思ふ道の朧かな　桐一葉
貸橋を盗み渡りの朧かな　羽風
石門を冷たう入りぬ朧月　梧月

日永

業平に鳴くや日永の里鶉　八重櫻
茶の下を狐が焚くや遲日寺　同

瑞光山

高垣に暮遠き日や木々の影　同
永き日や象の鼻出す檻の窓　あの兒
隣から時計見に來る日永かな　洲洋
川尻に棹が流るゝ日永かな　双湖

伐る松に印し廻る日永かな　佛丈
永き日や碑刻む丘の上　香濤
汐泡の輕石になる日永かな　香骨
皆寐るや遲き日を行く舟の中　蓮月
暮遲き庭木の映る障子かな　松軒
古き松庭に笠して遲日かな　魚鱗
東海道駕一つ行く日永かな　村雨
永き日や淺間の煙雲となる　笑堂
崖の土日永の道に崩れけり　郭公樓

暮春

枸杞和も春行く酒の下物かな　木風
泣上戸どれ程泣いて春が行く　同
漬物の鹵汁も下りて暮るゝ春　同
行く春を魑魅にとられし美人かな　梧月
御成ありし別墅閉ぢたり暮の春　同
春暮れて行方もしらぬ狂女かな　同
卵生まぬ鷄美しく暮るゝ春　五城
行く春の白布かけたる樂器かな　鐵雄
伸びそめし蘇鐵の心や暮の春　神櫻
うたゝ寐に春の行方の嘘かな　行々子
遠出などすなと御閨や暮の春　八重櫻

冴返

峰の灯や星坐に近く冴ゆ返る　八重櫻
惜む人に遺る美田や冴ゆ返る　同
清水の塔や洛中冴ゆ返る　諷軒
野社や水田を前に冴ゆ返る　翠峰城
參禪の山に雪あり冴ゆ返る　辛浪
竹の窓冴ゆ返る夜の灯白し　ゐの兒
參殿の廊艶々し冴ゆ返る　淞東子

夏近

夏近し湖水に散る竹の花　八重櫻
驛路に遂干しけり夏隣　同
桐の虫糸引き下る夏近し　神櫻
莢豆をむしる日夏の隣かな　同
恨むことはたと覺むるや夏隣　村雨

春の夜

羽織着て寐て居る君や宵の春　毒佛
春の夜の温泉に疲れけり燭の下　辛浪
春の夜の鏡に赤き狐ひかな　里靜
思ふ事綴る草紙や春の宵　活林
麗かな庭に機糸のべにけり　八重櫻

麗

麗かに囃す地鎮や宮普請　同
麗かや飛ぶ鳩見ゆる大社道　同
麗かや幟を染める筆の空　同

春淺し

枯蘆に柳綠す春淺き　八重櫻
春淺き物日に假の渡しかな　同
春淺き野越に酒肆もなかりけり　同
菊の芽に春尙淺き故園かな　魚鱗

暖

豌豆の心とめに出る暖き　八重櫻
暖き雨乳垂れ樹の機嫌かな　同
暖に土佐の札所を打つ日かな　松濤樓

春寒

鶴の脚とが〳〵として春寒し　里靜
春寒きものゝ埃や黴の上　同
剝製の鶴や机邊の春寒し　雪江

長閑

下駄はいて畑打つ人長閑かな　ゐの兒
我鶏の隣にうたふ長閑かな　珊瑚城

二月

釣堀の旗新らしき二月かな　蛙房

雪折の竹浸る水も二月かな　梧月

餘寒

裸文も山人の招き餘寒かな　八重櫻
涸井戸に水の戻らぬ餘寒かな　同

春旱

畑打の鍬の響や春旱　八重櫻

三月盡

戲作書く三月盡の燈下かな　ゐの兒

人事

紙鳶

大凧を上げ了せたる据わりかな　八重櫻
凧畫きの夫婦机を並べけり　同
剃かけの頭の空や凧　同
句合や二十二番の凧　同
五形田に里の子凧を合せけり　ゐの兒
風を得て畫龍聲あり凧　蘿月
馬士の子や嬉々として凧を買ひ歸る　十峰
組み落つや大和河内の凧　五城
大河の上に撓むや凧の糸　雪の舍

風落ちて鶯の立ちたる水田かな　あの兒

雛

くけ糸のあらはに赤し雛の袖　八重櫻
との雛の箔や落ちけん塗盆に　同
玉の井を二人女雛の汲まれけり　同
飾り樣牛馬を末に雛かな　同
水莖の匂ふ雛の名帳かな　同
ともすれば鞘走るなり雛の太刀　桐一葉
灯を消してはのかに白し雛の顔　同
可愛さの別けて末子の雛かな　十峯

摩耶參

埃あびて摩耶に參らぬ荷馬かな　八重櫻
摩耶參道の蹤躅に馬糞かな　同
谷川に馬洗ひけり摩耶參　同
松風や馬嘶きかはす摩耶參　同

某入營

摩耶一の名馬うたせつ首途哉　同

種物

種蒔くや蝼蛞這ひ上る足の甲　八重櫻
三代目儒者を出せし種屋かな　同
行燈や明日蒔く麻の種選び　同

種貿の木に金のなる話かな　香骨

汐干狩

簪に蟹押へけり汐干狩　石鼎
落つる日に人の面照る汐干かな　水聲
龜岩の甲踏みて行く汐干かな　里靜

山燒

山燒の麓走りし獸かな　映紫樓
山燒いて雨欲すれば雨のあり　六花
夜の帆を照らして遠し山燒く火　桐一葉

桑摘

桑摘みの何が螢したる額かな　杉園
雨と見て桑刈りに行く人數かな　止鶯
桑摘の桑がくれなる話かな　梧月

菊根分

菊根分南山の雲晴るゝ日に　硯田
口ずさむ遲日の吟や菊根分　十峯
銀將を肩に掛けゝり菊根分　米樹

踏青

踏青の左右に尊し富士筑波　菊村
踏青を恋にす二人かな　桐一葉
踏青や絹の裳に脛寒き　梧月

海苔	海苔麁朶や日和の浪の打ちよする 舟を上つて海樓に海苔炙りけり	如翠 八重櫻
茶摘	隱士出て茶を摘んで居る爪長し 古き實を誰が礫する茶山かな	八重櫻 同
鰍鱸	ふらこゝや顏淸きかゝり人 ふらこゝに我黃昏るゝ園生かな	松濤樓 魚鱗
初午	初午や鳥羽の遊女が藁草履 初午に御領田打の儀式かな	紫汀 八重櫻
野燒	野火を消す呪文や臼に伏せにけり 野火を見てより寢て覺めず狐憑	八重櫻 桐一葉
雁風呂	雁風呂の薪にからむ藻屑かな 雁風呂や末の松山眼に曇る	ゐの兒 梧月
曲水	曲水の汀に侍る蛙かな 詩に流れ歌に淀むや巴字の盞	柳村 松濤樓

蓮植	本山の蓮得て植うる小寺かな 蓮植ゑし鉢等閑に垣根かな	梧月 同
畑打	丘の上いつか開けて畑打 畑打や五刑も知らぬ村の者	五城 桐一葉
木の實植	山籠せしを思ふ日木の實植う 木の實植う山の圖を家の寶かな	八重櫻 同
出代	出代や竹筒割れば錢五十	矮松
二日灸	木の端の僧もすうるや二日灸	蝶羽
野遊	遊ふ野の道やちゝの木はゝうの木	桐一葉
摘草	我が先に狐惚れけり草摘女	八重櫻
鷄合	鬪ふや橘の鷄藤の鷄	桐一葉
涅槃	香ついで遲日覺ゆる涅槃かな	ゐの兒

薪能　薪能山風餘所に更けにけり　松濤樓

春惜む　莖切つて高菜に春を惜みけり　八重櫻

繪踏　天草に美女あり出でゝ繪踏かな　映紫樓

彼岸　佛壇の花に蝶來る彼岸かな　松聲

鮒膾　客中の風物寒し鮒膾　梧月

海雲　海雲採夕波ゆるき舟の腹　梧月

泊狩　鈴子さして安き心や夜の花　里靜

釋奠　先生の古き袴や釋奠　蝶羽

寒食　寒食や堂に上れば鹿の糞　八重櫻

爐塞　鳥取温泉即事　出雲訛湯女も語りつ爐の名殘　八重櫻

雉

動物

雉吊りてラムプ明るし料理の間　八重櫻

木硯の裏に見せたる雉子かな　同

太閤が攻めし城址や雉の聲　同

馬場乘の旗高き日や雉の聲　同

追風に御峯下りや雉の聲　同

潮踏して取りつく山や雉の聲　同

筒音や法度を破る雉の原　同

木々立てる山は活きたり雉の聲　同

持山を賭にする日や雉の聲　同

これ切りの霜や雉鳴く山日和　同

塞上に見ゆる一花や雉子鳴く　乙字

木流しの聲聞かぬ日や雉子鳴く　同

雉鳴くや池の向ふの松林　如翠

峠越す後ろに淋し雉の聲　山村

雉鳴くや瓦燒くなる關の跡　蛙房

山拓き鍬入るゝ日を雉の鳴く　冬水

枯木採る山靜かなり雉の聲　秋汀

山獨活の故郷戀し雉の聲　師竹

横裂けの柳が障子や雉の聲　六花
幾度か雉に驚く山路かな　羅月
獲て戻る雉に輝く夕日かな　梧月

雲雀

麥畑の小寒き風や夕雲雀　八重櫻
桑の香の滿ちたる空や鳴く雲雀　同
拔きすてる麥の黑穗や鳴く雲雀　同
風雲や地藏の森へ落雲雀　同
農會の庭先揚る雲雀かな　梧月
筏組む水あたゝかや鳴く雲雀　同
中高に畑あゝ野や揚雲雀　同
山中に畑拓けて雲雀かな　同
柴立てる豌豆畑や鳴く雲雀　十峯
飛ぶ雲雀苗代菜萸に老いにけり　同
舌の根の渴いて下りる雲雀かな　桐一葉
郡山聲降る如き雲雀かな　同
一筋の野路の空なる雲雀かな　五城
俳神に召されて上る雲雀かな　あの兒
初旅の關を越えけり夕雲雀　湘碧
香具山の高さに上る雲雀かな　冬水
川舟に野人の酒や鳴く雲雀　松濤樓

鶯

樫の木や鶯雨に籠り鳴く　八重櫻
鶯や衣干すてふ山の上　同
鶯の大樹に鳴くや山の寺　同
松の中に鶯鳴くや保養院　同
鶯や繪皿に絞る草の汁　同
鶯や綠樹はさかる十字街　同
鶯や永き日を知る氷室守　同
鶯や地機の紺にさす日影　同
花菜萸に鶯の鳴く谷淺し　同
鶯や新居の林もの淋し　同
鶯や窓にふたがる山の腹　桐一葉
鶯や小山隔つる君が家　同
古道や鶯人を見て逃ぐる　虛子
入海の藍や鶯山に鳴く　里靜
鶯や笛の竹伐る國栖の人　曲村

燕

木流しの高瀨早瀨や燕　八重櫻
峯越しに燕飛び込む戸口かな　同
燕や澤邊淋しき暖道　同
寄る波にぶつかり飛べる燕かな　同

燕や櫓立てする陣の原　同
行春の空高に飛ぶ燕かな　映紫樓
梁に料理見て居る燕かな　同
燕藥賣る店並びけり　白瓜郎
棟梁の法被に裳す燕かな　東雲
傾城の傘の下越す燕かな　花の舍
巣半ばにして來らずなりし燕かな　千鳥

歸雁

波に拾つ草鞋の空や歸る雁　八重櫻
干す船の腹起す空や歸る雁　同
青き降る野澤の雨や歸雁鳴く　同
網舟の幸なき夜や歸る雁　梧月
引き返す船の故障や雁歸る　同
木蓮の雨に歸雁を聞く夜かな　水聲
遡る筏に雨や歸る雁　神櫻
雁去つて沼の水たゞ青きかな　玉玲瓏
白魚の網に歸雁の涙かな　魚鱗
柴漬の柴焚く風呂や歸る雁　禾水
雁去つて春たゞ雲と水とかな　松濤樓
微塵屋根に干す日や雁歸る　破敵
半島の黛雲や歸る雁　水紫

枕頭の山水青き歸雁かな　桐一葉

蝶

山蝶の雨に日暮るゝ木立かな　八重櫻
蝶々の吊らるゝ樣や花の藥　同
藤波にゆられ心の蝶々かな　同
種づもる畑や蝶飛ぶ桝の空　同
麥藥を染める草戸や蝶々飛ぶ　神櫻
低い垣低い庭木や蝶々飛ぶ　同
黄と白と夢の上舞ふ蝶々かな　蝶羽

悼

白き蝶西へ渡りぬ水の上　梧月

蜂

蜂を燒く山莊の夜の魔風かな　松濤樓
棲む棲まぬ蜂の巣二つ古廟　同
懸く畑の萱荒々し蜂の聲　八重櫻
蜂飛んで枝卸す檜の風高し　同
山拓く人數に出たり蜂の群　水人
巣を燒くや焰に狂ふ夜の蜂　村家
蜂の巣や撞かで久しき鐘の中　千鳥

蜆

宵泣のよべを思ふや蜆汁　八重櫻

山國に蜆を産す湖水かな　同
めそ〳〵と雨の降る日や蜆汁　同
蜆汁樂屋に鍋を盡しけり　同
山の町小雨の中を蜆賣　魚鱗
春淺き井出の草戸や蜆汁　笨堂
江村の宿に花なし蜆汁　桐一葉

田螺

持ち古りし火打袋や田螺賣　笨堂
引越の其夜淋しや鳴く田螺　穀雨
山水の柳田に痩せし田螺かな　藍青
寒食の夜を鳴く桶の田螺かな　助二郎
觀念の蓋を閉ぢたる田螺かな　蘿月
種芋の腐る日頃や田螺鳴く　一巴

若鮎

底砂の隈なき川の小鮎かな　里静
折れ曲る水の瀬鳴りに小鮎かな　同
若鮎や岩うゝり立つ水の隈　桐一葉
案内者の湯女がよく釣る小鮎かな　同

蠶

燭臺を中に四方の蠶かな　八重櫻
蠶飼せぬ淋しさいふや妻籠　同

蠶室に赤き鼻緒の草履かな　柳下
枝桑のかけ橋渡る蠶かな　翠影

蛙

人の寐し頃降る雨の蛙かな　魚鱗
水に浮くは口角の泡蛙かな　春光
思あり露石蛙を放ちけり　羽風
更けて入る温泉靜かや遠蛙　梧月

虻

椿散る葉蘭の中や虻の聲　魚鱗
花菜萸の上風に飛ぶ虻の聲　同
茶の花の後れ淋しや虻の聲　神櫻
油滓畑に置く日や虻の聲　梧月

囀

囀や一樹茂りし古き塾　繞石
囀や佛師が庭に梨花白し　十峰
囀や朝温泉の槽に溢る時　八重櫻

雀の子

雀子のよるや長者の飜れ米　映紫樓
雀の子苗場に高き一木かな　木風
鐵漿つける豆や雀は三番子　梧月

白魚	白魚を精進落の酢味噌かな	十峰	
	白魚の網をふるふやはの光	八重櫻	
戀			
百千鳥	百千鳥鳴けば鳴かねばなつかしき	梧月	
猫の戀	戀猫を俵の中へ入れにけり	八重櫻	
蛇出穴	蛇穴を出づるや木瓜の花赤し	羽風	
引鶴	鶴引くや霞む吳の山越の山	梧月	
鳥の巣	鳥の巣に松の古さよ金閣寺	禾水	
引鴨	鴨引いて成りし城下の盟かな	八重櫻	
蜷	一鄕の憎まれ者や蜷を捕る	梧月	
鳥交る	附け芝の堤新らし鳥交る	矮松	
龜鳴く	空寺や龜鳴く池の雨暗き	繞石	

鹿落角	落し角古きをかけぬ柚が宿	松濤樓	
孕鹿	孕鹿茅花の風に眠りけり	梧月	
春蟬	蜆掻く江に春蟬の聲遠し	八重櫻	

植物

櫻	二間床四幅對櫻活けにけり	松濤樓	
	苔清水鳥居て花をこぼしけり	同	
	關跡に關の餅賣る櫻かな	同	
	遣唐使筑紫に花を惜みけり	同	
	灯す舟灯さぬ舟や花おぼろ	同	
	料理屑瀧へ捨てけり花の茶屋	同	
	花見んと膾にあてたる路金かな	同	
	鳥目も落花も葬女の狹筵に	同	
	女等の伊達の薄着や初櫻	同	
	櫻散る秋津島根や青海波	同	
	岩切つて新に花の一路かな	同	
	早く來て花待つ樣や湯治人	同	

花の莫蘆重箱すべる敗き處　同
國栖の野のこけかゝる樹も櫻かな　同
蜂の居て妹が怖れや花の幕　同
落つる日に一山越にし櫻かな　同
舞の裾さばく蓆の落花かな　同
水に鋤く蒐田寒し山櫻　八重櫻
苔深き朱門の道の遲櫻　同
此境や遲き櫻に青嵐　同
旅痩の眼に山櫻白き見ゆ　同
降るべくとして降らず櫻に人多し　繞石
土佐が繪の山櫻かな霞かな　同
遊女町の灯ともす櫻々かな　桐一葉
樽飲や鬼に扮せし花見人　同
髮結うて明日の花見を待つ夜かな　鶴代女
横雲や花に明けゆく松山城　文麗
檜苗植う谷口廣し山櫻　神櫻
戀風に魔風に花の亂れかな　映紫樓
人戀し宵の櫻に灯のともる　鶉居老
清水の舞臺に花の嵐かな　虹風
山越ねて有馬に出たり遲櫻　五呑
亂の後寺領安堵の櫻かな　坡酔

桃

花の幕出でにし君が行方かな　宅野子
傘さして落花に通る女かな　破敵
灯ともして馬を引き出す櫻かな　幽峯
山莊の戸に雲落つる櫻かな　村雨
地車に子供乘せけり桃の花　八重櫻
湖渡る記や島桃の盛り見て　同
沙魚の子は雜魚より苦し桃の宿　同
城南に殘る草家や桃の花　同
牛角の賣め網解くや桃の花　同
小屋よりも積藁よりも桃高し　同
公文所に布衣詰めし世や桃の花　同
沼舟に桃見戻りの莫蘆帆かな　同
桃散るや打ち返したる畑の土　梧月
立て古りし江戸繪屏風や桃の宿　同
桃の雨蛤を燒く匂ひかな　同
桃咲いて一日施行の渡しかな　魚鱗
鷄鳴いて家に人なし桃の花　如翠
一村は平家の族や桃の花　二水
塀の上に鷄鳴くや桃の花　佛丈
野の桃や衣干すてふ山も見ゆ　里静

麥畑や爪上りなる桃の寺　五城

柳

四刑廢して流刑殘る柳かな　八重櫻
川越えて宿老に見ゆ柳かな　同
粟降りし古記も柳に哀れなり　同
絕處海苔場もありて柳かな　同
毛拔け時犬寐くたれて柳かな　同
椽側に柳しだるゝ宿屋かな　鏡湖
魚市の果てゝ淋しき柳かな　素波
纜を女がからむ柳かな　西來
夕燒の川遠光る柳かな　水聲
投網舟歸りて柳暮れにけり　柳風
網干せば柳の影となりにけり　桃村
魚提げて舟上りたる柳かな　莖草
寮生の惰眠にたるゝ柳かな　禾水
筏さす竿に虻來る柳かな　松濤樓
家數に町めく道の柳かな　映紫樓
砂賣りて世渡る里の柳かな　桐一葉
酒桶の横たへてある柳かな　梧月

椿

義旗擧げし跡を墓場や山椿　八重櫻

浦つゞき一むら椿林かな　同
荒れ〳〵に鴨場の柴屋落椿　同
玉藻草納め掛けゝり椿宮　同
茶畑の塔下の道や落椿　同
林中に子弟を敎ふ椿かな　同
山の池水滿つる時落椿　同
長者原も名和氏のあとや椿森　同
捨舟に落ちたまりたる椿かな　梧月
古寺や椿に風呂の火屑捨つ　同
物の怪に住まざる寺や古椿　同
古井戸の眠りさますや落椿　桐一葉
山塞に鬼神祭るや古椿　同
紅葉する何のおどけ木山椿　神櫻
埋れ井の宿の淋しき落椿　里靜

藤

蜂巢くふ何の枯木や藤からむ　松濤樓
舟中に藤仰ぐ重き險かな　同
山蜂のすがる離るゝ風の藤　同
山莊の藤仰ぐ蔦渡しかな　同
山寺や古き櫻に藤からむ　富城
突き出でし岩に藤あり湖晴るゝ　矮松

白藤やよき井戸もてる山の家　征帆
佛性の雨情の藤の白きかな　禾水
法螺貝に藤挿しつるや堂の軒　八重櫻
龜井戸や席畫を濶ぐ藤の下　桐一葉

梅

禮樂の國衰へず梅の花　梧月

連勝

梅咲いて連日立つる國旗かな　同
古弓を衣掛竿や梅の庵　同
黑狗の子の白狗や里の梅　五城
紅梅や歌の中なる人戀し　天泉
紅梅や日只閑なる社家の樣　魚鱗
目に映る梅よ櫻よ八家文　蝶羽
梅展敷人の遊ぶに任せけり　里靜
唇の紅の乾きや梅寒し　水聲

躑躅

谷口を限る堤の躑躅かな　八重櫻
山住や机前の躑躅高く咲く　同
一の温泉は熱きに過ぎし躑躅かな　同

尼子城址

躑躅咲いて頂遠し九十九折　同

櫻過ぎて躑躅に開く茶店かな　淞洲
新綠の山深く來て躑躅かな　春光

或夜書屋の整理をなし俳句草稿二山三山を得たり

どの山も躑躅に赤き保津の道　巨文星

馬酔木の花

馬酔木植ゑて山に住めども世を捨てず　八重櫻
野馬酔木は雜木の丈に流れ水　同
旅人の御堂にさせし馬酔木かな　同
山裾に小屋造りすや花馬酔木　同
草高く咲く茱萸もあり花馬酔木　同
杉植ゑて三年の山の馬酔木かな　同
雨後に見る笄蛭や花馬酔木　神櫻

山吹

山吹や茶も捨植の堤原　八重櫻
山吹に垣して住める峠かな　同
山吹や谷田控へし寺の門　同
山吹や雨にぬれたる馬の顔　花心
山吹に鮠飛ぶ水を湛へたり　魚鱗
山吹や轡置きたる石の上　嵩南

蘆の角

蘆の芽や舳沈みに行く筏　魚鱗

水の上の日に這ふ虫や蘆の角　同
限りなき水に向く家や蘆の角　同
蘆の芽や水門番の裏戸口　松濤樓
蘆の芽や瀬のある所なき所　水人

辛夷

山莊や雜木の中に辛夷咲く　淞洲
寺よりも古き家あり辛夷谷　佛丈
家の間の種井澄みけり辛夷咲く　八重櫻
瑞光山
垣石の皮がこぼるゝ辛夷かな　桐一葉

連翹

連翹や日和の人の廂掃く　里靜
連翹に葱を伏せたる畑かな　同
水に垂るゝ連翹結ひし垣根かな　八重櫻
詩成らぬ思連翹もつれけり　梧月

菜の花

鶏鳴く畦や菜種のはしり咲　穀雨
菜の花に曳舟通ふ祭かな　止鶯
菜の花や日の照り返る笠の裏　柳雨
壬生念佛果てゝ雨降る花菜かな　梧月

土筆

草稀れに小松が下の土筆かな　繞石
道芝や土筆はうけて馬の沓　十峰
靜かさや砂に土筆の影法師　松濤樓
短きはつくし長きはつくしし　泉水

梨の花

南蠻にゆかりの寺や梨の花　松濤樓
跳ね出でし盥の鯉や梨の花　波舍
身を耻ぢて夜行く郷や梨花白し　羅月
衰へし碩儒の家や梨の花　梧月

薊

日強き薊の影や草の上　松濤樓
草深に因屋の道の薊かな　魚鱗
山蜘蛛の日當り走る薊かな　羽風

獨活

桐立つて淋しき中や作り獨活　八重櫻
山蜂の聲する高き木獨活かな　同
花茨夷のくだつ畑や作り獨活　同

芹

芹たけて家鴨は親になりにけり　松濤樓
朝水の澄み渡りたる芹田かな　八重櫻
べた〳〵と雪ふり埋む芹田かな　鐵笛

苣	野良犬に棒喰はしぬ苣畑	凍泉
	麓路や川に傾く苣畑	水人
川柳	盗まれし舟の在りかや川柳	桐一葉
	下りて見る水なき澤や川柳	梧月
虎杖	山近し茅花が中の虎杖	矮松
	山人の眞似猿が折る虎杖	松濤樓
韮	韮の香や暗き厨に水を飲む	水聲
	韮白根一夜寐させぬ辛子味噌	八重櫻
木の芽	杵空にとばしるものや木の芽餅	八重櫻
	繋ぎたる馬の欠伸や木の芽吹く	梧月
	出雲八重垣神社境内竹深き處一小池あり銭か池といふ叅詣の男女一文銭を紙片に乗せ之を浮べ沈み方の遲速によりて其縁の早晩を占へり	
竹の秋	竹の秋銭の沈める池古し	水聲

若草	若草に夕月匂へ三笠山	松濤樓
海棠	海棠や心糸竹に晴れやらず	魚鱗
蕗の薹	椒殼を貯ふ坪や蕗の薹	魚鱗
春の草	舟に酔うて土手に上るや春の草	兒郎
銀杏の花	花銀杏虻鳴けば散る日高し	魚鱗
豆の花	春遲き鹽湯の宿や豆の花	筆堂
菫	松原の砂にかたまる菫かな	魚鱗
李の花	田螺鳴く水に李の落花かな	矮松
大根の花	泊瀬路や初時鳥花大根	井化

○

雜

盛砂に將草生にぬ春の宿　羽風
盜人に枕投げゝり春の宿　同
ちんちろと鈴鳴らす春の社かな　村家
金屏の身に照る春の泊りかな　梧月

夏之部

天文

薰風

薰風や餌箱にあふれ鳴く家鴨　八重櫻
薰風に馬耕の業を敎へけり　同
薰風や河伯の床の一つ岩　同
釣糸の沈む十尋や風薰る　同
薰風や釣殿に滿つ水の影　同
薰風や尾を提げ戻る鯉跳ぬる　松濤樓
薰風や裏帆打つまで船間切る　同
薰風や窓下の湖に網の音　同
薰風や籬外一歩杉高し　水紫
新居只一机一硯風薰る　同
大瓶にあふるゝ水や風薰る　雪の舍
船の酔薰風樓にさましけり　同
經寫す筆の先より風薰る　如翠
薰風や遊行勸めの草莚　魚鱗
薰風や柱にかけし故人の句　十峰

薫風や水に峙つ十神山　江村
薫風や庭一ぱいの蹲松　巨文星
海士が髪踵に及び風薫る　松露
薫風や熨斗長々と祝儀樽　ゐの兒
薫風や湖渡らんの騎馬並ぶ　佛丈

雲の峰

放綿を屋根に干しけり雲の峰　八重櫻
日の道にあたるゆるぎや雲の峰　同
投げ苗のはつるゝ空や雲の峰　同
松脂の岩に流れて雲の峯　同
湖や暮色の外の雲の峯　同
雲の峯低し茨ちる水の宵　同
水の無き河を渡るや雲の峯　ゐの兒
雲の峯川堀る人の裸かな　柳風
獨活長けて雲の峯立つ日となりぬ　桃里
藻草買ひに伊豫船寄るや雲の峯　牧星
雲の峯一河流れて群馬かな　梧月

夏の月

魚分けに立ち會ふ長や夏の月　八重櫻
棒提げて盗難見舞ふ夏の月　同
棹やらん水聲つ池や夏の月　同

船に疊む板音暮れぬ夏の月　同
壕に沿ふいち廣き街や夏の月　同
舟橋を渡り馴れけり夏の月　佛丈
田の水に浸る塚あり夏の月　同
濱へ出る道の廣さや夏の月　同
人聲を奪ふ瀬音や夏の月　松濤樓
梅檀の香滿つる空や夏の月　ゐの兒

夕立

夕立や荒瀬も落つる一峽に　八重櫻
夕立雲頭八股裂けにけり　同
風雲の照りまけ空や夕立雲　同
茨の香の地に狼籍と夕立かな　松濤樓
夕立や明け放ちたる東大寺　矮松
瀬や意宇の山より夕立す　紫映
夕立や馬も顔程軒を借る　梧月

青嵐

高機を樹下に立てけり青嵐　八重櫻
富士垢離の脊中吹くなり青嵐　同
御鏡に榊匂ふや青嵐　同
芝海老の滿ち來る汐や青嵐　同
青嵐六甲山の館かな　落水

水の上に逆枝ゆる木や青嵐　里静

卯花の下し

御傘せよ卯の花下し小忌衣　八重櫻
里堤卯の花下す茅の穂かな　同
新らしき傘に卯の花下しかな　田士英
普請湯や卯の花下し砥石桶　松濤楼
別るゝや卯の花下し傘と傘　桐一葉

梅雨

戸樋の下蕋敗き置ける梅雨かな　八重櫻
黒奴の麥恐ろしき梅雨かな　同
梅雨あきの船虫多き波止場かな　同
機糞のうこら掃くなり梅雨じめり　辛浪
空梅雨の鼬鳴くなり池邊夜々　梧月

雷

遠雷や蕗切り居れば雨そぼつ　松濤楼
戸ざし居る圓山ホテル雷雨かな　同
はた〳〵と帆を打つ風や夜の雷　白瓜郎
鳴神の下を一舟渡しけり　ゐの兒
罌粟坊主相打つ風やはたゝ神　禾水

五月雨

雜巾も漏りうけし桶に五月雨　八重櫻

船宿に物見の窓や五月雨　同
鹿溜に蕗の捨葉や五月雨　雨村

梅雨晴

梅雨明けや湖心の舟に霧重し　魚鱗
梅雨晴の板雲吐く峠かな　同

夏の雲

牛は皆榛の木蔭に夏の雲　五城

渡洋送別

青東風　青東風や君待つ船の遠がゝり　双葉

夏日

堂の屋根冷や〳〵と枇杷の夏日陰　梧月

虎が雨

曾我戀し芝居を見れば虎が雨　映紫樓

地理

清水

西瓜入れて清水溢るゝ手桶かな　八重櫻
我飲めば馬飲まんとす清水かな　同
草清水物見に出でゝ掬びけり　同

一脈は洞に通ふ清水かな　同
山本に地藏の清水甘きかな　同
清水あるほとり萱立逞しき　同
叢に白き花咲く清水かな　村家
白銀の器や清水奉る　里静
玉造る里を流るゝ清水かな　吟雪
弘法の遺跡に數ふ清水かな　島洋

病牀吟

一碗の清水に點す藥かな　水人
苦清水山風餘花を飛ばしけり　ゐの兒
大木の花こぼるゝや草清水　魚鱗

古寺

石壘綻びて湧く清水かな　桐一葉
銀山の麓流るゝ清水かな　梧月

夏の川

夏川を定めの宿へ渉りけり　八重櫻
夏大河砦下に放つ輕騎かな　同
洲鎮めに渡御の神事や夏の川　同
夏川を朝に渡り歸省かな　同
夏川に鍋洗ひけり精進落　里静

夏野

土賊出でゝ馬掠めたる夏野かな　八重櫻
一平ら不毛の謂れ夏野かな　同
醜草に黄なる繭見る夏野かな　松寶
雨吐いて峯に去ぬ雲夏野かな　松濤樓

夏の山

夏山や犬山椒のとげ〳〵し　八重櫻
岩松に絶ねぬ雫や夏の山　同
夏山や甲府通ひの魚賣　ゐの兒

青田

此頃の富士に雲なき青田かな　笨堂
水塚に泥龜出でし青田かな　八重櫻

時候

短夜

若竹の白粉つけて明け易き　佛丈
明け易き簟立つや白き鳥　同
明け易き夜舟過ぎけり汐一路　同
汐癖に船向變り明け易き　同
短夜や庭木にかけし晒布　八重櫻
大漁に揚ぐ短夜の花火かな　同

短夜の舟垢汲むは孤かな　同
難所近う舟落ちにけり明急ぐ　同
旅の約明け易き戸を敲かれし　梧月
短夜の油盜むや御堂守　同
短夜を盥の蟹の行方かな　同
濡衣の下に置く火や明け易き　同
短夜や碁盤の下のこぼれ石　松濤樓
短夜の滿月低き芒かな　同

出雲安來乘相院境内に淙々として盡きざる清水あり町人一夏の飲料となす

絶ねず人水汲む寺や明け易き　十峯
板の間に傘の雫や明け易き　雪の舍
短夜の明けて居るのに鼠かな　征帆
明け易き襖の虎の眼かな　月村
溶いてある皿の眼藥明け易き　村家
花垂れて明け易き草眠りけり　水紫
石蕗の葉に短夜の雨溜りけり　柳風
鯉捕れて葬ぐ浦や明け易き　朱屋樓
短夜を枕の主の行方かな　天籟
明け易き空飛ぶ鳥も懷しき　牧星
短夜の明けて白帆や難波潟　桐一葉

涼

母と我居る涼しさや蚊も鳴かず　八重櫻
涼風に何の薬すれや裏の畑　同
夕風の涼しき草に雀かな　同
我筆の紙に活きたる涼しさよ　同
朝網に鮒一匹や蟬涼し　同
此岩に天斧を思ふ涼しさよ　同
老僧を擁して夜話や涼一味　松濤樓
水軍の夜涼に堪ねず絃歌かな　同
涼しさや早瀬に落す舟の棹　同
涼しさや脊見ねて魚瀬を上る　同
松風の夜半は涼しや恐ろしや　鶴代女
涼しさや里を離れて一構　萊雨
涼しさや戸口かくるゝ布一木　映紫樓
吊り下げて鐃涼しき柱かな　四京
涼しさや柱少き家造り　桐一葉
不說々不聞々涼しうてころ　羽風

過去帳

十代は端居涼しや紙返し　梧月

暑

踏鞴滓人の搔き居る暑さかな　八重櫻

人暑し鮒まじなふ鍋の蓋　同
水神の怒りの泡や沼暑き　同
雨暑し野蠅はなれぬ傘の内　映紫樓
粒らかに蚋飛ぶ坂や風暑し　同
暑一天澁桶煮ゆる臭ひかな　里靜
豊寐起魂入らぬ暑さかな　松濤樓

五月

早苗田の虫掃く五月日和かな　八重櫻
澁紙を敗き始めたる五月かな　同
新鑛を積む馬つゞく五月かな　同
鳥地獄見るや五月の石見口　同
泣き魚の網にかゝるも五月かな　同

秋近

鶯草の白きを見れば秋近し　雨水
島寺の會坐も果てけり秋隣る　佛丈
腹子なき大きな鮒や秋近き　魚鱗
灯に青き虫來る秋近し　梧月

四月

生け魚に湖の簀立も四月かな　八重櫻
滝開きある山行事四月かな　同
佐渡が島四月曇りになりにけり　魚鱗

旱

赤き藻の水吸ひ盡す旱かな　八重櫻
杉菜嚙む髮切虫や旱畑　同
悲しき田恨めしの旱草生ねぬ　同

卯月

夕ざれば鶯わく湖の卯月かな　策堂
卯月來て出目の小魚の子持かな　八重櫻

土用

牛洗ふ土用行事の一つかな　松濤樓
富士晴れて土用の雲の動きかな　羽風

初夏

篠刈つて拓く山邊や夏に入る　あの兒

五月晴

岩の上に泡ふく蟹や五月晴　二喬

五月闇

鶏を射る弦の響や五月闇　あの兒

日盛

日盛や流れて白き松の脂　梧月

水無月

水無月やうぎ屋根に置く青松葉　翠影

人事

鮓

鮓待つて夢成り難く月白し　八重櫻
鮓の句を一夏一句とほめにけり　同
庵を結ぶ古城の下や一夜鮓　同
川風に飛び入る蜂や鮓の茶屋　同
獨坐幽篁暫く鮓の飯さます　同
花白き蓬が宿や一夜鮓　同
鮎鮓を笹の廣葉に卷きにけり　同
鮓桶に飛ぶ山蝶の白きかな　同
山蟻や御山に古き鮓の宿　同
夏狹の白き山邊や鮓の宿　同
鮓店の狙白し燭の下　松濤樓
簾捲く主の心鮓切らん　同
若葉吹く窓下に置くや酢の飯　同
鮓を壓す主に何の喜悅かな　同
鮓桶を据うる板間の光りかな　同
鮓の味酒三杯の中にあり　里靜
鮓に酒善罵の客の笑ひかな　同
狐啼く草加泊りや一夜鮓　笑堂

竹影婆娑として鮓壓す我に迫るかな　鶉居老
鮓壓すや舟玉祭雨となり　神櫻
二十日月竹に上りぬ鮓馴れぬ　草人
竹浸す水渉るへし鮓の宿　禾水
どろ〳〵と遠雷や鮓の石　梧月

日傘

追ひつきて連になりたる日傘かな　梧月
丘に家見ゐて日傘の上るかな　同
練兵を遠く見て居る日傘かな　靜處
人待つや日傘まはして橋の上　潮月
夕榮の長橋渡る日傘かな　鶉居老
引越の樋にさしたる日傘かな　不外
水夫の妻市に日傘をさしにけり　松濤樓
足を汐に洗はれありく日傘かな　八重櫻
野の宮を拜んで通る日傘かな　羽風

沖膾

漕ぎよする兜が島や沖膾　松聲
飛ぶ鳥は藤九郎かな沖膾　神櫻
沖膾むらぶす雲にはたゝ神　映紫樓
一帆に島かくれけり沖膾　村雨
青山に一縷の雲や沖膾　桐一葉

皿濺く水の絲や沖膾　梧月

蚊帳

膾潰す夢癖癒にて蚊帳かな　八重櫻
たてよこと又吊り直す蚊帳かな　同
物の怪の蚊帳に迫るや木曾の宿　松聲
年寄や夕仮すめば蚊帳の中　里静
月譽めて蚊帳つる宿の女かな　松濤樓
蚊帳吊つて人は蚊よりも小きかな　凸堂

納涼

掻き亂す夜汐美し納涼舟　八重櫻
松明や夜越の山の納涼場所　同
尻まくつて瓜見廻るや夕納涼　村家
納涼舟月を右にし左にす　雨水
ゆられ行く紅提灯や納涼舟　十峯
獨者夕顔暗く納涼みけり　桐一葉

田植

朝空に驚仰がるゝ田植かな　八重櫻
代馬に乘せ戻りけり歌上手　同
友遠方より來る
泥足で君迎へたる田植かな　村家
拓き田を植うる里出の囃子かな　波舍

磯晴に帆影さす田を植るにけり　松濤樓

川狩

二人連れ話少なに夜振かな　桐一葉
川狩や夜更くる程に膾冷ゆる　同
すつぽんをもて餘したる夜振かな　雪の舍
我黨の網巧みなる夜振かな　魚鱗
川狩や水芹むるまで踢る　羽風

團扇

みどり子を餘りにあふぐ團扇かな　八重櫻
繭汁の加減を團扇煽ぎけり　同
澁團扇米踏む窓に挿みけり　草人
尼寺や二本備へし白團扇　十峯
額髮鋏むを受ける團扇かな　魚鱗

舟遊

舟遊夕陽江を染めにけり　八重櫻
闇中に大欠伸すや舟遊　同
舟遊の旦に樓を放れたり　同
一碧の醇酒匂ふや舟遊　同

蚊遣

誰彼の來て焚き添へる蚊遣かな　ゐの兒
蚊遣にと木の如き蓬刈りにけり　村雨

藻汐草くべる明石の蚊遣かな　禾水
竹林に煙吸はるゝ蚊遣かな　桐一葉

祭

夜の花の白きかざしぬ祭人　八重櫻
明神の麥飯赤き祭かな　同
浦祭難船もなき今年かな　松濤樓
湖の中の小さき島の祭かな　里靜

幟

正秀が家の幟か湖南かな　八重櫻
高臺の桝積む上の幟かな　同
古幟一甲冑の知行取　同
家譜に知る巨松の齡幟かな　春光

竹植

竹植ゑて臥牛の石に憩ひけり　翠影
明哲の定めの節や竹を植う　八重櫻
竹植ゑて直なる徑作りけり　同
弟子僧の鼎鬻分かたずよ竹植うる　同

夏書

白玉を夏書の紙に鎭しけり　里靜
文鎭は雷の爪てふ夏書かな　神櫻
花白しと一夕の記も夏書かな　八重櫻

夏行

白雲に魂行く解夏の朝かな　不冠
夏百日日々雲の日記かな　翠峯城
夏籠や我煩はす村の事　桐一葉

扇

夕づく日下山に翳す扇かな　颯軒
日參の木蔭に憩ふ扇かな　喇水
山雲の下行く人の扇かな　四骨堂

竹婦人

抱きすねて横にふくるゝ竹婦人　八重櫻
遺物見れば秘藏の中の竹奴かな　同
君が文にも愛惜ぶかぬ竹奴かな　同

鵜飼

銀山の砂が流るゝ鵜川かな　笨堂
波の闇亂れしと見る鵜飼かな　松濤樓
業は鵜川に老いてしまひけり　里靜

畫寐

掛茶屋に瓜を枕の畫寐かな　黃汀
綠蔭に衣かたしき畫寐かな　桐一葉

甘茶

年々の甘茶に黑む佛かな　蝶羽

投げ花の甘茶にひたる有難や　八重櫻

氷室

高山の裾に道ある氷室かな　八重櫻
熊笹や氷室の道を拓きけり　梧月

帷子

月番の御講の世話や黄帷子　笨堂
帷子や蜂に恐るゝ庭歩行　八重櫻

行水

行水や麻渡る風に月上る　水聲
行水の裸も追ふや放れ馬　松濤樓

施米

山梔子の花咲く寺の施米かな　映紫樓
わせ法師鉦泣かせ來る施米かな　八重櫻

風鈴

風鈴や窓一ぱいに嵐山　魚鱗
風鈴や香具山風たま〳〵に　桐一葉

水泳

汐浴びぬ日の高浪に鴎かな　松濤樓
泳ぐ身の輕さや潮の綠なり　同

團扇自畫賛

羅　羅をひくや天女の天津風　鳴雪
羅の帷靜かに御惱かな　梧月

佛生會

蓴山椒筍鮓や佛生會　十峯
豌豆の花の田舍や佛生會　八重櫻

草合

佩玉の人側らに草合　里靜
草の名を假名で書きけり草合　同

心太

心太あるに畫簾に筏よす　繞石
嫁入荷の中休む茶屋や心太　同

夏祓

幣そよぐ竹の柱や御祓川　十峯
御渡りの菰敷く橋や夏祓　八重櫻

袷

青豆は鐵漿つけにけり初袷　村雨
袷著て紺屋が爪の青かりけり　桐一葉

青簾

青簾濱行く人の見られけり　繞石
青簾葵祭も過ぎにけり　五城

菖蒲湯	菖蒲湯や刀疵ある髯の人	五香
菖蒲葺	建てかけの柱に結ぶ菖蒲かな	八重櫻
虫干	虫干や守武が句食ひし紙魚を打つ	映紫樓
	觀劇	
編笠	編笠の行き逢うて事起るへし	桐一葉
衣更	十年の髯落しけり衣更	桐一葉
雨乞	凌霄に照る雨乞の簿かな	秋汀
火串	木々の葉の裏白う照る火串かな	梧月
安居	南谷の殘る一宇に安居かな	八重櫻
水飯	水飯にこれや小皿の甘露梅	蝶羽
六月會	大乘に松の嵐や六月會	五城

川祉	淺き瀬に篠の御垣や川祉	羽風
粽	山桑と粽の笹も一駄かな	八重櫻
灌佛	灌佛や麥の中なる淨土寺	村雨
葛水	葛水や山蟻走る盆の上	梧月
掛香	掛香や醫師が妻の拔衣紋	桐一葉
川床	川床や月下の水を弄ぶ	八重櫻
簟	卷物を伸ばし長さや簟	梧月
藥摘	雲南の賈人參りぬ藥の日	八重櫻
氷賣	雲の峯の麓に聲や氷賣	梧月
單衣	鞍坪に綻びやすき單衣かな	八重櫻
行水	行水の裸も追ふや放れ馬	松濤樓

田草取　立鍬に脱ぎかけ簑や田草取　魚鱗

一夜酒　我が宿や猫も背めたる一夜酒　八重櫻

花御堂　花御堂佛の頭つかへたまふ　魚鱗

晒布　蝶の來る燈下に疊む晒しかな　八重櫻

動物

時鳥

火渡りの行場の空や時鳥　映紫樓

時鳥二階の客を戀しけり　同

花の過去月の未來や時鳥　同

時鳥月三題の畫に一つ　同

蕨糊臼に汲む夜や時鳥　八重櫻

織ぎ鞍の誰がぬくもりや時鳥　同

舟落す急ぎの棹や時鳥　同

黑雲の明るきへりや時鳥　同

水かぶる高瀬夜舟や時鳥　木風

時鳥湖ある國の夜明かな　同

月代を出す夜舟や時鳥　同

海のよな河渡る夜や時鳥　神櫻

此山を蕪村は畫きぬ時鳥　同

浪かぶる舟に女や時鳥　松濤樓

ぎいと卷く帆を横たふや時鳥　同

時鳥鳴くや松島五大堂　如翠

橘の香に降る雨や時鳥　洲洋

卯の花に音なき雨や時鳥　明星

太閤に糞ふりかけぬ時鳥　ゐの兒

時鳥瓢の花の夜明かな　東籬

水明り晒し踏む夜や時鳥　雲桂樓

井戸堀の息入れ酒や時鳥　蕗村

水棹ぬけて漂ふ舟や時鳥　佛丈

時鳥椚の花の薫る夜に　蘆人

時鳥兜に香を焚く夜かな　柳風

くづれたる罌粟の白さよ時鳥　十峰

夜水取る畦の焚火や時鳥　石村

ほの白き椎の夜空や時鳥　圭々

火串捨つ蘆明らかや時鳥　孤幽

雛不逝一路の草や時鳥　市村

月全く雲を出でたり時鳥　田士英
蜘蛛の子の動く袋や時鳥　禾水
寐る前に坐敷を掃くや時鳥　稻青

閑古鳥

熊蜂も空巣の庵や閑古鳥　八重櫻
崖の上に何番小屋や閑古鳥　同
木疎らに寺跡ならん閑古鳥　同
槍霰鳴り杉霰叫ぶ閑古鳥　同
青き葉に墨塗る護符や閑古鳥　同
道盡きて崖見下ろすや閑古鳥　如翠
瀧見ねて瀧道もなし閑古鳥　北浪
半日を日陰の里や閑古鳥　桂州
杉老いて名もなき塚や閑古鳥　杜月
我笈を見て鳴くものや閑古鳥　吻水
木樵晴石割墨閑古鳥　禾水
仙人の伺ふとも聞かず閑古鳥　神櫻
我生くと人知らざらめ閑古鳥　桐一葉

蝙蝠

雨近き江のあだ暮や蚊喰鳥　八重櫻
築人をひきし古江や蚊喰鳥　同
蝙蝠や臼に似しものさし荷ひ　同

殘る獨りに落す総湯や蚊喰鳥　同
積藁も暮れ合ふ籔や蚊喰鳥　同
蝙蝠や村學究が塀の外　文魔
掘り捨てし井戸掘小屋や蚊喰鳥　坡酔
酒旗下ろす竿にふためく蚊喰鳥　十峰

螢

畫の籠いかに淋しき螢かな　松濤樓
魔所へ來て傘の裏這ふ螢かな　同
田植して宵寐の里の螢かな　同
盜人の小舟さす江や飛ぶ螢　八重櫻
からむしの丈を出水や飛ぶ螢　同
青黍に雨の螢や流れ飛ぶ　同
草の葉を上りて下りる螢かな　桐一葉
水草を照らして過ぐる螢かな　梧月

鮎

鮎網も一打持ちぬ小百姓　八重櫻
青黍の月に鮎釣戻りけり　同
鮎釣の笠に若葉の雫かな　十峰
立久惠や舟を泛べて鮎を燒く　里静
鮎燒や筑波颪に火の起り　徐白
車負うて鮎川渡る夕かな　松露

鮎掛や猿が流す藤の莢　佛丈

水鶏

裏門を鎖しに行けば水鶏哉　十峰
耽り讀む雨月草紙や鳴く水鶏　ゐの兒
門風呂に傘さす宿や鳴く水鶏　曲村
狐の火水鶏が叩き消しにけり　佛丈
蘭を刈つて鳴かずなりたる水鶏かな　二喬
水鶏鳴いて藪に灯見ゆる田町かな　梧月

雨蛙

草の戸の郵便箱や雨蛙　八重櫻
薄藪の高きに啼くや雨蛙　同
雨後の樹の滴り久し枝蛙　同
草の戸に干す木海月や雨蛙　同
山房の壁を飛ぶや雨蛙　翠影

金魚

水やれば水に押さるゝ金魚かな　東泉
燭の下紅爛々と金魚かな　湘碧
よき金魚廓の池に老いにけり　北浪
青桐の影池に落つ金魚かな　井化
玻璃球に金魚一上一下かな　桐一葉

蟬

糊粕を打ち明けにけり蟬夕　八重櫻
糠雨の夜を鳴く蟬や草庇　同
山寺へ行く酒賣や蟬の聲　同
居る蟬のそゞろ鳴き出す籠かな　五城
蟬鳴くや釣瓶から飲む水の味　映紫樓

墓

墓出でゝ夕の天を澄しけり　八重櫻
城跡の敗石墓になりにけり　同
大墓の穴に山禽吸はれけり　同
墓鳴くや大爐塞ぎし居間の下　同
崖道の墓蹴落すや雲起る　同

蛇

十薬の花にかゝるや蛇の衣　映紫樓
石垣や風に吹かるゝ蛇の衣　巨文星
古刀蛇截りしより祟かな　秋葉
蛇の衣狐の褌茂りけり　八重櫻
蛇に逃げて浮藻の蛙かな　桐一葉

まひ〳〵

まひ〳〵や川に流るゝ麥埃り　十峰

石橋喜雨君敎職に在る事二十五年門弟相謀り其祝賀會を開く

喜雨亭や池のまひ〳〵舞ひ廻る　潮月
まひ〳〵や藻刈の舟の過ぎしあと　藍亭
筍の桶にまひ〳〵舞はせけり　八重櫻

羽蟻

山寺や虫干の袈裟に羽蟻飛ぶ　梧月
出雲雲樹寺
勅額の金色寂びて羽蟻かな　同
山寺や古き杵より羽蟻立つ　好々
法參の椽踏めば立つ羽蟻かな　ゐの兒

夏蟲

水番の提灯うつや灯取蟲　村雨
山蟲も川蟲も來る行燈かな　佛丈
灯取蟲祭の衣を疊みけり　水聲
水樓に燭の高さや灯取蟲　八重櫻

毛蟲

日盛の道を横ぎる毛蟲かな　青瓢
信仰
蝶になる樂ありて毛蟲かな　桐一葉
草の家の水甕を這ふ毛蟲かな　梧月

蚊

竹の皮落ちて鳴き立つ畫蚊かな　一白

蚊の夕破鐘を撞く野寺かな　古溪
蚊柱や蓼に棹さす夕渡し　松濤樓

行々子

葭切や棹一さしに渡る水　八重櫻
菰沼に落つ蘆川や行々子　同
葭切に雨待顔の樋守かな　素波

老鶯

老鶯やもろむき山に暮を鳴く　八重櫻
老鶯や櫟立ち添ふ十二坊　桐一葉

蜘蛛の子

朝涼を蜘蛛の子下る簾かな　松濤樓
經文の上を蜘蛛の子走りけり　月弟

夏の蝶

喘ぎ行く眼に慄しや夏の蝶　梧月
凌霄の高きにつくや夏の蝶　同

翡翠

翡翠の嘴の下行く遊魚かな　松濤樓
翡翠や葭四五本の流れ水　八重櫻

鹿の子

松葉掻く人に馴れたる鹿の子かな　笑堂
百度踏む我を見て居る鹿の子かな　佛丈

蠅　干鮎の蠅をふくなり南風　八重櫻

羽抜鳥　羽抜けていよいよ長し鶴の脛　十峰

蛞蝓　椽朽ちて釘現はなり蛞蝓　村家

蝸牛　角文字の系圖の末や蝸牛　八重櫻

松魚　桝飲みの賭も目出度し初鰹　ゐの兒

水馬　礫打ちし水輪に乘るや水馬　松濤樓

蟻　蟻や土用の雨の少し降る　東天紅

蚯蚓出　古道や行人絶にて蚯蚓出づ　ゐの兒

植物

若葉　組む時の井桁清めや若葉風　八重櫻

報賽に土易ふる宮若葉かな　同

肌明り距立つ木の若葉かな　同

上下に瀬踏を放つ若葉かな　同

御靈屋の樓門赤き若葉かな　三角堂

鳥居見にて社見にざる若葉かな　諷軒

白鳩を飼へる若葉の館かな　松實

普請する大いなる寺の若葉かな　幽峰

川隈に水泡の絶にぬ若葉かな　十峰

寄宿舍の裏は山なる若葉かな　里靜

とどろきて瀧見の橋の若葉かな　魚鱗

山猿の逃腰射けり谷若葉　禾水

鮮かに虹立つ原の若葉かな　桐一葉

棠陀師の鳥も商ふ若葉かな　梧月

牡丹

牡丹活けて蕪村句集の講義かな　梧月

稻妻に牡丹の花やいたむらん　同

獺祭書屋にて二句

襖開けて藥の匂ふ牡丹かな　同

藥瓶の盆に崩るゝ牡丹かな　同

年久しく迄はざりし人の庵を訪ひて

立ち寄れば花や昔の富貴草　羽風

一輪は日陰となりし牡丹かな　同
僧痩せて牡丹大きし信樂寺　文魔
閉門の庭に崩るゝ牡丹かな　穀雨
金持ちて驕る凡夫の牡丹かな　五呑
長安の酒家に咲きたる牡丹かな　別天樓
老僧や如意に牡丹の蜂拂ふ　驟雨
南山の靈芝張氏の牡丹かな　葉櫻
人込を牡丹捧げて通りけり　桐一葉

若竹

鍬鍛冶の裸身さます今年竹　八重櫻
下枝伸びて高まる節や今年竹　同
若竹や鉾立て上る兜虫　同
門畑の若竹高し驛の家　同
村塾の風呂あらはなり今年竹　石村
若竹に釣燈籠の古色かな　月村
子を產みに來る泥龜や今年竹　草の月
今日の節昨日の節や今年竹　水紫
若竹に朝の灯白き祠かな　沙汀

桐の花

道場のうしろ畑や桐の花　八重櫻
桐の花茶山の道に散つてあり　同

寶藏に二重の垣や桐の花　桐一葉
門監に鍬かゝるや桐の花　同
花桐や萬靈塔を羽蟻出づ　翠峯城
八ッ晴に二度干す衣や桐の花　松濤樓

蓮

蓮を見る舟の輕さや水馴棹　八重櫻
蓮浮葉鳴る白銀の雨の脚　同
大いなる蓮池のある野寺かな　村家
蓮吹いて霽晴れ渡る四山かな　映紫樓
池殿の塗欄干や蓮の花　里靜
會果てゝ人皆蓮に對すかな　梧月

葵

靜原や古き家並の懸葵　桐一葉
畑から國分寺見ゆ葵かな　同
池堀つて汀になりし葵かな　四京
椽に出て伸びする人や花葵　水人
衣干す人に葵の高さかな　梧月

麻

桐山の裾に麻立つ畑かな　八重櫻
壁覆ふ麻の高さや山の家　同
松の下に刈り立てし麻や濱畑　同

川上の畑や次第に麻多き　同

夏木立

油木の匂ひ満ちたり夏木立　八重櫻
ねら〳〵と眞昼物の音夏木立　同
本丸や一際高き夏木立　同
どの道へ馬盗人や夏木立　五城

凌霄

經藏に風入るゝ日や凌霄花　笨堂
學校は凌霄咲いて休みかな　静處
居留地や護謨の大樹に凌霄花　一石
雷は過ぎて梢の凌霄花　五城

散松葉

脂白く落ちたる石や散松葉　八重櫻
山寺の白き葵や散松葉　同
弓を引く莚の上や散松葉　梧月

合歡の花

繋がれて時立つ馬や合歡の花　嵩南
山守の滯團干しけり合歡の花　八重櫻
合歡の花唐の女の眉細し　桐一葉

畫顔

なよ竹に畫顔からむ苫屋かな　曲村

畫顔や疲れし馬の沓替ゆる　水人
上げてある棍に畫顔からみ咲く　枕水

麥

麥秋や豆の莢たのに飽く心　十峯
麥熟れて晩望の眼を射る日かな　松濤樓
荒馬の鼻鳴らし行く穂麥かな　梧月

棕櫚の花

山梔子と棕櫚と咲きけり山の堂　八重櫻
年々に棕櫚咲き家は荒れまさる　同
繭を煮る古女房や棕櫚の花　四京

茨の花

干網の裾廣げゝり茨の上　松濤樓
花茨夜釣の道にはの白し　衣沙樓
茨踏んで蘆立つ岸に出でにけり　八重櫻

卯の花

卯の花の庭に燒き居る鯰かな　雪の舍
卯の花に夕霧塞き山居かな　八重櫻
石垣が水吐く寺や花卯木　梧月

百合の花

嘴開き紅吐く百合の蕾かな　里静
滿園の百合天日に盛かな　同

鬼百合に照る日憎みて籠かな　繞石

若楓

點心の鉦鳴る院や若楓　碧帆
若楓社前に日傘たゝみけり　村家
文机や夕日遮る若楓　桐一葉

瓜

乘合の馬車の前荷や瓜茄子　五城
馬の子に戯せて嬉しや瓜の籠　八重櫻
播木で瓜を探りし夜盗かな　梧月

茂り

馬洗ふ水盥きし門の茂りかな　素波
瑞光山
鷲は老いて五坊の茂りかな　十峰
石槽に温泉溢るゝ若葉かな　草の影

茄子

明け易き夜の間を茄子の太りかな　風旌子
幸に妻と食ふ程茄子かな　八重櫻

林檎

招魂祭林檎は赤く餅白し　八重櫻
塗床の水の如きに林檎かな　梧月

葉柳

葉柳の下に舟出の灯かな　飛入
葉柳の門や日傘の物貰ひ　鱶洲

蓴菜

蓴菜や河童を祀る池の宮　桐一葉
大木の沈みて見ゆる蓴かな　同

木下闇

山蛭を恐るゝ傘や木下闇　村家
木下闇岩を吹き出る風寒し　蘿月

紫陽花

紫陽花や盥の糊に藍の色　五城
點滴に色さめ易き四葩かな　松濤樓

百日紅

碑の苔のからびや百日紅　雪の舍
繪簾に百日紅の斜陽かな　村雨

河骨

河骨や水を飲み居る白き犬　映紫樓
河骨に魚飛んで水光りけり　二一

餘花

峰下りに見る谷寺や餘花白し　曲村
川漁の篝ほの照る殘花かな　村雨

藻の花	水霤のはなれぬ朝の花藻かな	水聲
薔薇の花	梅雨あきの水々しさよ白薔薇	八重櫻
燕子花	洗鍬掛けたる壁や燕子花	里靜
藜	律院の裏は畑の藜かな	田士英
橘	橘に有無の雨雲過ぎぬ	五城
夕顔	椽先や夕顔に吹く醉の息	桐一葉
夏草	夏草に家四五軒や城の下	八重櫻
筍	筍や蓼太が門下五百人	桐一葉
早苗	玉苗を洗ふ鮎川のほとりかな	八重櫻
栗の花	村塾に易の講義や栗の花	羽風
玉卷芭蕉	白石が庭に玉卷く芭蕉かな	蝶羽

鴨足草	鴨足草研ぎし庖丁に風冷ゆる	水人
綿の花	莫蓙を着て水撒く人や綿の花	十峯

○

雜

奥深に柱の飽や夏の寺　梧月

秋之部

天文

秋の風

秋風の宮や老樹と朱の鳥居　八重櫻
賣りしまふ糠も粃も秋の風　同
秋風の梁晛まいて閑居かな　同
大いなる雲の穴目や秋の風　同
秋風の野に罠置かぬ掟かな　同
秋風の撞木を渡る鼠かな　同
秋風の寺に仕舞ひぬ花火筒　同
大湖の明るき空や秋の風　同

畜賛

櫃開けて秋風古き寶かな　桐一葉
國の産馬を數へつ秋の風　同
陰干の薄荷を吹くや秋の風　穀雨
秋風や木賊むら立つ空屋敷　神櫻
門を外す大戸や秋の風　映紫樓
貝塚を穿つ人あり秋の風　春城

傾きし樋守が家や秋の風　葵雨
釣鐘に天狗礫や秋の風　不積
秋風や越の湊の子買船　里静
しごかれし紫蘇の穂立や秋の風　十峰
秋風や市に隠れて爪長し　鐵骨

某寺にて

秋風や杉戸の名畫世に消ゆる　梧月

秋の雨

淋しさや秋の雨降る水の上　梧月
筬虫の這ひ出る宿や秋の雨　同
よごれたる羊の脛や秋の雨　同
吹き殼の淋しき綿や秋の雨　八重櫻
秋雨や穴觀音の宿り人　同

病める妹を訪ひて

門を入れば八手に秋の雨淋し　牧星
堂守のもの讀む淋し秋の雨　柳村
秋の雨悲み秋の風哭す　五城
葬の過ぎて暮るゝや秋の雨　蜆水
俳諧の蕉家二軒や秋の雨　虹陽
秋雨に美服を掩ふ合羽かな　里静
閣の下に身振ふ鹿や秋の雨　冬城

秋雨や戸樋の音聞く書の疲れ　青斗

天の川

乘掛に銀河の一句先づ吐かん　八重櫻
出水落つる野面の空や天の川　同
水捨つる二階の窓や天の川　同
大岩にぶつかる波や天の川　同
廣原に草の夜積や天の川　同
大根の二葉の上や天の川　同
洛陽の城高うして天の川　同
舩の汐の光りや天の川　同
天の川穂立の匂ひ空に滿つ　同
大空の水づく限りや天の川　同
漁歌起る十神の闇や天の川　十峰
梨むしる顏に夜露や天の川　黄秋
盜み食ふ西瓜の空や天の川　桐一葉

霧

朝霧の晴れ行く道や馬の顏　八重櫻
一の坂霧の中にて越にけり　同
谷へ〳〵次第に霧の濃く沈む　同
一日の獵界霧の晴れにけり　同
霧の上穂並に杉の美しき　同

霧の中祖師の行跡拜みけり　同
干網に風見ゐて霧晴るゝかな　水聲
霧晴や梅桂の實の川に落つ　同
松杉の狹霧起すや大社　梧月
どろ〳〵と板燒く音や霧の中　同
竹の村鷄鳴いて霧晴れぬ　繞石
夕霧の馬乘りかへる驛場かな　村家

月

森を出て河畔の月に佇みぬ　八重櫻
又一几月の供物の草高に　同
月祭る野鍛冶が高き設け棚　同
走りゆく月の白さや鱗雲　同
船の月帆綱を傳ふ鼠かな　映紫樓
門前へ汐さす家や月の秋　靜處

子規子逝く

君逝くや月は上野の森にあり　默笑
法窟を出でゝ隈なき月夜かな　辛浪
並べたる茶碗茶筅や庵の月　十峯
更けて逢ふや訪ひ遂へたる月の友　桐一葉

稲妻

稲妻や籠の鶏の片隅に　八重櫻

井堰越す水の白さや稲光　同
稲妻やギーと横吹く帆百反　同
此日荒れて此夜稲妻頻りなり　同
稲光病舍に氷嚙む夜かな　同
稲妻や鬼の褥と見ゆる雲　破敵
稲妻や蜘蛛の下れる西廂　柳盡
稲妻や動かんとして案山子あり　凸堂
虫枯れの白き一田や稲光　佛丈
玻璃宮の噴水白し稲光　梨東

露

鍬鍛冶へ大露の道踏みにけり　八重櫻
露ふるや畑肥ゐたる三河島　同
露に來て朝の御法に會ひにけり　同
屁出の馬の子飛ぶや露の原　同
もろむきの露宵めて居る兎かな　雪の舍
露の音栗鼠の往來を知る夜哉　驟雨
草山の月にほろふる夜露かな　里靜
橙も昔からあり露の宿　映紫樓
露寒や苗木の中に兎罠　芹里
柩行く道や木の露草の露　餓笛

後の月

蒟蒻を搗く音更けぬ後の月　村雨
後の月書院の障子細目かな　柳風
波しぶく磯の芒や後の月　春童
芋の葉をゆるがす風や後の月　餘白
机には榎の實椎の實後の月　鐵笛
檜田に湛へし水や後の月　八重櫻
捲いてある簾の影や後の月　梧月

野分

馬の親の子をば離さず野分かな　八重櫻
高鍬に鍬のもたるゝ野分かな　同
野分の日ひそか歩きの龜一つ　同
拙宅は窓が外れし野分かな　水人

初嵐

白襖夕初嵐渡るなり　水聲
草の戸やしろりと明けて初嵐　八重櫻
竹に居る髮切虫や初嵐　梧月

星月夜

門衛にあかす大志や星月夜　八重櫻
風神の眠る大樹や星月夜　同

名月

名月や瀧に横たふ峰の影　松濤樓

秋日

秋日影棕櫚を藜に移りけり　八重櫻

地理

初汐

初汐や濱名の松をひたすまで　松濤樓
初汐や海幸祝ふ一漁村　同
初汐や大船近き磯の倉　秀青
初汐や夢に見しよな高麗の船　三郷
初汐や者凱旋の港船　笨堂
初汐や岩を飛び飛ぶ石たゝき　十峯
初汐や黍の畑と平らなり　五城
初汐や舟から上る旅役者　飛白

花野

鷲の行く花野の南下りかな　八重櫻
出城ある國の表の花野かな　同

子規子追悼

彷彿と花野を君が一人旅　柴舟
池一つ露湛へたる花野かな　松濤樓
參學のむなしく歸る花野哉　活林

秋の水

煤板を洗ふや暮るゝ秋の水　驟雨
秋の水神事の釜に汲みにけり　紅星
古縄の鰻と見ゆれ秋の水　梧月

落し水

蓼白く雀老いけり落し水　八重櫻
稲を守る神の別れや落し水　同
山本の柿は紅葉や落し水　笨堂

僧堂

秋の山

愚眼の雲明眼の晴や秋の山　活林

秋の原

遠近の石の白さよ秋の原　活林

秋の野

山門を出づれば秋の大野哉　活林

時候

朝寒

朝寒の水にいざよふ日影かな　八重櫻
伏せかへて朝寒の葱の勢ひ哉　同

朝寒の水碧し嘉陵三十里　同
朝寒の濱松原や鶴別れ　同
朝寒や柳取り込む禰宜が家　石村
朝寒の山刈り出すや柴柏　湘碧
朝寒や柄杓の屆く井戸の水　素波
朝寒や飲み殘したる水藥　梧月

秋の日

秋の日や韭咲く中に蜂の聲　八重櫻
干瓢に風を入れけり秋日和　同
秋晴や薪つけ馬の舟渡し　同
秋晴れて七尾の隈を出舟かな　同
秋晴や乘り移りたる大汽船　靜處
秋晴や一閑見ゆる峯の肩　雲水

冷か

冷かに銀一枚や齋の料　八重櫻
冷かに鼠も住まず空厩　同
冷かや湯殿へ通ふ竹の下駄　柳風
冷かや椎の下道寺に入る　曲村
文鎮の石冷かに夜學かな　五尺
冷かに眞砂を浪のしざりかな　映紫樓

夜寒

野良猫の障子破りし夜寒かな　翠峯城
山宿の壁に蜘蛛打つ夜寒かな　山村
寺に寐て天井高き夜寒かな　水葉
水車場に提灯見ゆる夜寒かな　薄墨
僧は只問に答ふる夜寒かな　桐一葉

初秋

初秋や水邊に咲く白き花　桐一葉
秋や來る蚊帳と障子の間かな　同
網干杭打ち補ふや今朝の秋　佛丈

漸寒

うそ寒やしれもの小屋の斧と銃　八重櫻
起きてまた何考ふるうそ寒み　同
老懶は眉毛の塵やうそ寒き　同

夜長

碁の隣俳諧の我れ夜長かな　梅鶯
碇網夜長の月に引きたるゝ　八重櫻

秋の夜

行燈をともして留守や宵の秋　竹堂
秋の夜の更けて釜鳴る圍爐裡かな　八重櫻

新涼

新涼の庭や子馬の尺を取る　十峯

殘暑

晒場の水に月あり秋涼し　神櫻
羽赤き蜻蛉飛ぶや野の殘暑　佛丈
繩簾もつれがましき殘暑哉　八重櫻

秋の暮

百姓に芥賣りけり秋の暮　里靜
柴負うて水涉る人や秋の暮　近郷

暮秋

髮染める油盡きけり暮の秋　佛丈
古妻の胡芋も煮たり暮の秋　八重櫻

冬近

藥火焚く臼庭廣し冬隣　諷軒
眠り草眠り枯れけり冬隣　映紫櫻

忌日

身に入む

身に入むや父の怒の目の當り　神櫻

坐寒

迷ひなき山路と知れど坐寒　八重櫻

文月

旅衣京にすゝぎし文月かな　馬紅葉

八月　八月の船路に見たり正覺坊　梧月

木染月　門前の高き柿や木染月　羽風

九月盡　干茸に鼠のつくや九月盡　八重櫻

人事

毛見

茶屋女毛見衆の席に召されけり　八重櫻

毛見の衆を見送り戻る話かな　同

毛見もまだ尚じく〳〵と降る日かな　同

和田恩地毛見の願もなかりけり　同

年々の毛見によごれし袴かな　蝶羽

雨落つや物を書き居る毛見の帳　驟雨

毛見の衆の案内もすれば憎まるゝ　十峯

草の市

草市の露にぬれたる小錢かな　白顆

水郷の柳の下や草の市　神櫻

草の市人呼ぶ聲の哀れなり　八重櫻

荷車に裸火寒し草の市　羽風

送火

戰歿詞友を懷ふ

送火も十三年や感新た　映紫樓

送火に藁打石の光りかな　佛丈

送火や人も通らぬ門の前　梧月

子規忌

糸瓜忌や癖についたる四十人　八重櫻

山吹の落葉や凡月十九日　同

糸瓜忌や叱られし聲耳にあり　同

後の雛

土器の灯淋し後の雛　冬水

行燈に映る芒や後の雛　同

虫送

虫送稻妻遠き夜なりけり　村家

虫送西瓜畑に眺めけり　碧汀

掛煙草

日の干場風の掛け場の煙草かな　魚鱗

天つ日に煙草の廣葉ほしにけり　里靜

秋蚊帳

瘧落ちし夕を蚊帳に別れけり　穀雨

鵲の鳴く夜白しや蚊張の秋　桐一葉

夜學　佛丈
蘭の香のたゞよふ室の夜學哉
柿賈の子も交りたる夜學かな　三遊亭

新酒　八重櫻
頒健を報ず新酒の一句かな
我妻に愁も語る新酒かな　桐一葉

廻燈籠　四京
花燈籠籠の中に廻りけり
山の温泉の高き二階や走馬燈　村雨

砧　里静
月宮に銀の砧打たれけり
山轉じ水めぐる旅の砧かな　禾水

藥掘　八重櫻
岩が根に乏しき藥掘りにけり
背めて見る藥か非ず藥掘　桐一葉

天長節　八重櫻
酒保に來て天長節の軍歌かな
樽に菊天長節の屋臺かな　梧月

柚味噌　八重櫻
湧きやんで靜まりかへる柚味噌かな

碧雲の彼の發句男柚味噌燒く　桐一葉

施餓鬼　十峯
川施餓鬼旗に上りし盛かな

花火　桐一葉
星空におきまどはせる花火哉

牛蒡引　梧月
牛蒡引宵雨しみし土二寸

魂祭　月村
魂棚の高盛飯や萩の花

攝待　松濤樓
攝待や一宿の恩一誦の偈

門茶　佛丈
門茶煮し火屑消しあり萩の下

鳴子　松濤樓
大澤の斜日四方の鳴子かな

星祭　嘲水
物干に提灯つるや星迎

鰍漬　映紫蔣
かまつかの丈なす庵や鰍漬

どびろく　活林
どびろくや汝の怒遂に醉ふ

添水	寺による小家四五軒添水かな	梧月
案山子	農百圃案山子を以て終りかな	ゐの兒
崩築	さび魚の狂ひ上りや崩築	八重櫻
衝突入	衝突入りて椽に出でけり湖の月	佛丈
鬼貫忌	鬼貫忌各貧居八句かな	八重櫻
八朔	八朔や稻荷の末社請じけり	八重櫻
踊	しばしのいて顏さましたる踊哉	八重櫻
相撲	兵五六秋の力を相撲ひけり	羽風
秋惜む	秋惜む雜兵共が焚火かな	紫汀

動物

雁

辻君の齒を染めし世や雁の聲	八重櫻
雁來る日千里隈なく晴れにけり	同
廻し米待つ浦の夜や雁の聲	同
波の空雁行く椁のうねりかな	同
山の池夕日に雁の溢れけり	同
折りとりて夜の菊白し雁の聲	同
雁の聲藪打ちやめし夜空かな	同
初雁や水先案内の船あかし	同
外邊暮るゝ洲明りや雁鳴き渡る	同
番雁の下ろし定めぬ里日和	同
水郷や月の鏡に雁の影	桐一葉
初雁や江の水色を新にす	同
芭蕉葉の風收まりぬ雁の聲	梧月
風あとの草伏す原や雁の聲	同
雁鳴くや長橋渡る懷手	旭雲
蘆の中雁の衾の寄藻かな	郭公樓
雁の棹江頭に君を送りけり	啣水
雁鳴くや荷舟夜を漕ぐ小提灯	活堂
筏過ぎて暮れ行く水や雁の聲	竹似
夕燒に乾藻反すや雁渡る	松濤樓

灰汁桶の澄む空雁の渡りけり　草の影
雁の江に落ち失ひし繻珊哉　神櫻
鉢の繪や内外につゞく雁の棹　羽風

蜻蛉

稲塚の日々に減り行く蜻蛉かな　八重櫻
新らしき積藁の香や蜻蛉飛ぶ　同
水減りに簀の立てかへや飛ぶ蜻蛉　同
十雉殘る城の構へや飛ぶ蜻蛉　同
菰の根を物の細工や飛ぶ蜻蛉　同
照り雨のかしらや赤き蜻蛉飛ぶ　同
葭の穗の蜻蛉に魚の飛びにけり　同
墓の榕焚く枯れやうや赤蜻蛉　同
茶屋葭簀山影さして蜻蛉かな　松濤樓
施餓鬼棚組む夕川の蜻蛉かな　同
巡錫の心誘ふや赤蜻蛉　桐一葉
温泉に來て算盤遠し飛ぶ蜻蛉　同
蜻蛉や洲に横たはる花火筒　佛丈
赤蜻蛉糸瓜の水を取る日哉　辛浪
蜻蛉や夕寂さうふ松の影　郭公樓
砂に上げし錨の爪に蜻蛉哉　村雨
奈良坂や蜻蛉とまる馬の沓　去水

竹の坊夕空澄みて蜻蛉かな　梧月

蜩

蜩や葛籠干したる松の寺　葩琅
蜩や鐘樓の側の樅高し　鷹嘴
蜩や夕日法話の坐に迫る　水聲
蜩に今日行水の名殘かな　文々庵
蜩や塔に日殘る森の中　能火
蜩に早き灯や法の山　神櫻
蜩や宵寐の癖も愚に寒く　八重櫻
蜩や船灣に入り日は高し　羽風
蜩や府中に劃す一大寺　梧月

渡鳥

日出でゝ馬驅る野良や渡鳥　八重櫻
棚の物崩しゝ畑や渡鳥　同
小鳥來る里や稗こき黍絞る　同
畑の家の胡麻干す晴や鳥渡る　水聲
鳥渡る濱の離宮の一樹かな　同
公事の山視る日晴れたり渡鳥　三遊亭
二番藍刈る島畑や渡鳥　佛丈
柿の木に忘れ梯子や渡鳥　葩水

百舌鳥

百舌鳥鳴くや柵を營む蜜柑畑　八重櫻
山渡り百舌鳥放れずよ日の表　同
金堂や熊を透す百舌鳥の聲　同
端山來て畑開けたり百舌鳥の聲　同
夕日はや鍬いうがる丶百舌鳥の聲　同
百舌鳥鳴くや秋を煤掃く山の家　佛丈
枝豆の彈く日和や百舌鳥の聲　破敵

鹿

屋上の山廊下の海や鹿の聲　八重櫻
峯の鹿高瀬の漁火に鳴きにけり　同

正倉院

御風入すみたる窓や鹿の聲　同
鹿啼くや家より上に水の音　一喝
鹿啼くや春日の灯雨の中　樵女
鹿の秋奈良の社中の歌會哉　里靜

蟲

蟲鳴くや鍋の尻敗あるあたり　八重櫻
臼立て丶隙なき庭や虫の聲　同
清談數刻にして罷る蟲の聲　同
蟲なくや狸來ぬ夜の竹の弓　五城
提灯に人見送りや蟲の聲　雲水

歌ふ蟲に灯ともす蟲もありにけり　宮城

鶉

戀草の懷に鳴く鶉かな　桐一葉
戸隱の山の尾に鳴く鶉かな　同
寺見にて野面廣しや鳴く鶉　梧月
鶉鳴く地城のあとや草の丈　同
此道に夕となれば鶉かな　ゐの兒

鳴

鳴突の萱野に暮る丶顏淋し　桃の戸
鳴鳴くや田越の水の夕明り　綠葉
鳴打つや舟の筵の夕じめり　八重櫻

蟷螂

蟷螂の怒らぬ日とてなかりけり　桐一葉
罪の世や蟷螂の鉢蜘蛛の網　同
蟷螂の少し退き思ふやう　八重櫻

蟲

稻積んで塔の如しや蟲飛ぶ　里靜
鷄が追うて及ばぬ蟲かな　羽風
からびたる音に稻飛ぶ蟲かな　梧月

歸燕

銀杏散る風に燕の去ぬ日哉　北浪

政敎に鄕人疎し去る燕　佛丈
南船の帆につれ歸る燕かな　ゐの兒

竈馬

竈馬や竈の神の膝頭　ゐの兒
竈馬や鍬をかけたる土間の壁　梧月

馬追

馬追や筆筒の上の鋭立　十峯
馬追や簪店の夜の雨　梧月

鴉鶴

瀨枕の夫婦岩飛ぶ石たゝき　飛白
鴉鶴や筏難所の岩の上　佛丈

鰡

滿汐の網場の月や鰡の飛ぶ　神櫻
中天に鰡飛びかゝる月夜かな　八重櫻

落鮎

落鮎や川面たゝく雨の脚　穀雨
落ちく〳〵て身を浮草の下り鮎　八重櫻

雀爲蛤

桑名蛤
伊勢の雀皆蛤となりにけん　蝶羽

蟋蟀

蟋蟀蠹並べし樂屋かな　梧月

簑虫

簑虫の敢て移らぬ梢かな　桐一葉

蛇入穴

蛇は穴に淋しき村の道を問ふ　梧月

鱸

網乍ら鱸を擔ぐ月下かな　梧月

目白

籠の目白遠山日和鳴き張りぬ　梧月

太刀魚

太刀魚や一心太助市に見す　映紫樓

絡線虫

絡線虫やいとゞに衣を贈るとて　桐一葉

啄木鳥

啄木鳥のおのが古棲もつゝきけり　松濤樓

鰯

蒸も來て攫み分けなる鰯かな　八重櫻

沙魚

沙魚釣の調度匣中の意匠かな　梧月

秋の蝶

鹽車引きやすむ野や秋の蝶　曲村

河鹿　二峽過ぎて三峽聞く河鹿かな　飛白

椋鳥　椋鳥の飛ぶ銀杏かな紅葉かな　雪江

植物

芒

穂芒や蜻蛉釣る子の首の空　八重櫻

芒伸びし中に日向葵紫苑かな　同

汐早き瀬戸の島根の芒かな　同

廢園は松唯青き芒かな　同

待戀を靜まりかへる芒かな　同

花芒國の裏川北に落つ　同

山神の祭に芒撒きにけり　同

寺阪や芒が中に棕櫚の立つ　同

月の出に大鳥の立つ芒かな　同

大樺の雨しと〳〵ど芒かな　同

よせ返す風の芒となりにけり　同

並松の外の飛木や花芒　同

椿ある島の人家や芒中　同

穂芒や富士に分れて道淋し　桐一葉

野の岩に波の跡ある芒かな　同

蝦夷が島芒の中の雁皮かな　同

城の井の覗かれもせぬ芒かな　梧月

澤の方へ道低うなる芒かな　同

麓行く人語芒に聞にけり　同

大鳥のサクと糞する芒かな　里靜

絶頂に天日近き芒かな　天籟

月島にうよ〳〵芒と黍とかな　神櫻

多武の峰遠く晴れたり夕芒　水聲

水に遠く舟引き揚げし芒かな　四骨堂

紅葉

馬見れば知る御歸院や庭紅葉　八重櫻

舟に乘れば雨糸の明るき紅葉かな　同

樓上に建て〻增すものや山紅葉　同

舟倉に雀鳴くなり浦紅葉　同

末枯の河原遂や櫨紅葉　同

櫨紅葉高黍は刈り伏せられぬ　同

彼の峰に渡らんとする紅葉かな　同

ほがらかな紅葉日高き峠かな　同

島陰の潮動かずよ夕紅葉　同

夕紅葉石に躓く下山かな　桐一葉
紅葉見や幾度渡る谿の橋　同
一所江に景色ある紅葉かな　同
山禽に弩放つ紅葉かな　同
騎馬思ふ出城の跡の紅葉かな　同
上つ瀬に船橋見にて紅葉かな　同
うろくづももみづるや山の池古りて　同
鼻紙に大いなる紅葉挟みけり　十峰
邸深く車の音や夕紅葉　素波
掛茶屋の川に突き出て紅葉かな　蘿月
岩山の襞に家ある紅葉かな　水聲
晒せし水のすわりや夕紅葉　梧月

菊

漁師村に建つる一寺や菊の秋　八重櫻
白菊に首途の太刀の匂ふかな　同
千町田のあろじが植ゑし黄菊かな　同
棕櫚の下荒れ〳〵に咲く菊もあり　同
菊の中皎々と灯の高きかな　同
菊の戸に通ふ野鼠愛しけり　同
なよ菊の數咲き伏すよ庭回り　同
長梭の菊に觸るゝや筵機　同

畑とも庭とも見にてむら菊や　同
白菊に降り出す宵の寒さかな　同
銀屏に見すます菊の白さかな　同

題遺墨

松菊や三百年の秋の色　雌鳥
白菊にかゝる松葉や寺の寂　驟雨
市に出て佳節の菊の價かな　魚鱗
菜畑に菊も培ふ野寺かな　松聲
法皇の寫經もありぬ菊の寺　活林
ゆかしさは菊に立てたる古矢かな　柳風
提灯の火を剪る道の野菜かな　桐一葉
菊見客晴著に草履はきにけり　梧月

木槿

よき馬に人たかりけり花木槿　梧月
山遠き里の住居や木槿垣　同
釣瓶竿木槿の垣を道へ出づ　同
花木槿一言主の社かな　八重櫻
笈山伏訪るゝ垣の木槿かな　同
自炊する六疊二疊木槿かな　里静
花木槿歸省の人を訪ねけり　去水
木槿垣道を横切る鼬かな　能火

野の寺や鐘楼を劃す木槿垣　湘碧
捨猫のけろりと戻る木槿哉　葉村
日蝕の木槿に低き飛禽かな　桐一葉

芋

芋の葉や向ふの寺に日の當る　梧月
芋高し道が分れる一軒家　同
芋の葉に塔見ねりめし詣かな　同

過去帳

芋食ひの寂安居士は喉づまり　八重櫻
芋の子の利根ともなき鬚長し　同

子規子遠逝

先生は月の都へ芋食ひに　葉櫻
芋嚙る鼠も追はず俳諧寺　映紫樓
芋の葉に嘘の月夜や雨の音　紅山
芋の葉や銀河の水のこぼれ散る　碧帆
芋を掘る鍬の先なり秩父山　羽風

黍

黍の秋ありし大寺を思ひけり　八重櫻
唐黍を鼠嚙む音や畑の月　同
僧正の唐黍二つ焼かれけり　同
黍の道人贈を擔ぎ出でにけり　梧月
家に餘る澁紙黍に干しにけり　同
番小屋や黍に裸火ともし行く　同
黍の月みろか法師に出逢ひけり　桐一葉
城壁の外は黍吹く嵐かな　同
黍の葉のうよぐ月夜や走り雲　鐵雄
一隊の馬賊過ぎけり黍の月　鈍村

萩の花

木母寺の念佛淋し雨の萩　八重櫻
初瀬山の下にあるなり萩の宿　同
眼白鳴く日和の風やこぼれ萩　同
錆びかゝる水や野萩のこぼれより　同
杉山を萩咲く中へ下りけり　同
小屋の戸や萩一むらの赤き程　同
掛待の釜の光や萩の花　冬水
紐赤き鶉の籠や萩の宿　鐵骨
野鼠のもの食み居るや萩の下　桐一葉

柿

柿主は尼子の勢に參じけり　八重櫻
柿の主打ち重ねけり未定稿　同
柿の秋婆が拾子育ちけり　同
呼綱を分家へ引くや柿林　梧月

柿賣や凱旋門の傍に　同
猿曳も猿も柿食ふ野茶屋かな　潮月
山賊の柿園ひたる窟かな　郭公樓
分校に僧の教師や柿の秋　佛丈
巡錫に賑ふ寺や柿の秋　史好

芭蕉

銅蓮の水覆ふたる芭蕉かな　八重櫻
戻りつきて旅硯納めぬ芭蕉寺　同
雨二日芭蕉のびたる五尺かな　繞石
島寺や芭蕉に白き鳥の糞　黄秋
蕃人の矢を磨ぐ芭蕉月夜かな　凍泉
僧去つて歸らず芭蕉大破かな　松濤樓
硝子戸に愛す芭蕉の綠かな　桐一葉
壁白き湖畔の寺の芭蕉かな　梧月

鶏頭

大河越せし目に鶏頭の宿り哉　八重櫻
秋雨の中にかゝやく鶏頭かな　同

糸瓜忌

鶏頭は咲けど糸瓜は下れども　水聲
鶏頭に提灯を張る小家かな　村家
鶏頭や佛壇光る草の宿　松濤樓

松が根に鶏頭赤し濱館　桐一葉
古靴で水汲む人や鶏頭花　梧月

散柳

新道や附け芝枯れて散る柳　八重櫻
桶洩れの灰汁の乾きや散る柳　同
繋ぎすてゝ垢浸む舟や散る柳　同
籠り居の句がれを柳散りにけり　同
薬叩く音の夕や柳散る　松寶
柳散るや庭に干したる傘に　池水
川床の殘る柱や柳散る　子朗

荻

荻吹くや提灯消ねて夜半の道　梧月
串にせる太湖の沙魚や荻の宿　同
荻の宿一望の秋となりにけり　映紫樓
棹さして荻つきぬけぬ月の湖　里静
土手下りて假橋渡る荻の風　五城
網提げて土手行く人や荻の月　桐一葉

蕎麥の花

谷風の吹き上げに蕎麥の花白し　八重櫻
人買の蕎麥白き里を落ちにけり　同
寺婆の出代時や蕎麥の花　同

灌木の道に添ふあり蕎麥の花　同
今の世に袈籠見る里や蕎麥の花　桐一葉

瓢

瓢箪の垣や釣瓶の竿長し　村家
我庵はぐるり瓢の月夜かな　同
庵の瓢尻たゝく程になりにけり　村雨
ふぐべ皆風に寐られぬ悶かな　非都子
世の中へ尻の据はらぬ瓢かな　八重櫻

末枯

末枯に百舌鳥の贅食む鼠哉　八重櫻
末枯に霜茸黄なる走りかな　同
末枯に何の卷葉ぞ蟲の居る　同
末枯や大樹の瘤の宿り草　活林
末枯や鶏を商ふ町はづれ　梧月

南瓜

監獄の畑に大きな南瓜かな　羽風
狙に泰然として南瓜かな　同
黄金を腹一杯の南瓜かな　八重櫻
剪りとつて何ぞ重たき南瓜かな　梧月

芙蓉

杉の奥芙蓉目に立つ小寺かな　八重櫻

銀泉の塘にぱつと芙蓉かな　同
一山の秋一莖の芙蓉かな　溪月
大練寺水湧き立つて芙蓉かな　桐一葉

草の花

穴に入る蟹美しや草の花　松濤樓
子規子逝く。二句
草の花に蚤の灯や御佛　羽風
草花の褥に痛みなかりけり　梧月

綿

綿弓にわがねけん竹掛けてある　八重櫻
綿採ればそゝろ歩きの父老かな　同
摘み進む畝に眞白き木綿かな　松濤樓

栗

軍門に栗を贈るや山長者　四骨堂
栗燒くや机の上の太祇集　十峰
打伏せに大方空し栗の毬　八重櫻

蔦

山莊や庭石搦む蔦紅葉　四京
峰裂きし天斧祀れり蔦紅葉　桐一葉
山淺み蔦は櫨より紅に　羽風

落穂

落穂拾ふ踏切番の暇かな　翠影
落穂拾ふ人に鳥に夕日かな　柳風
野鼠の穴に溜めたる落穂かな　鐵笛

蘭の花

蘭の香に滿座の詩興溢れけり　活林
祕書曝す寒き日和や蘭の花　嘲水
蘭の香や両伯の圍棋伯仲す　里静

棗

厄月の風に落ちたる棗かな　好々

戰地觸目

小姐美なる張氏が門の棗かな　萱草

糸瓜

引越の糸瓜も取つて運びけり　雪江
椽側に取りて久しき糸瓜かな　簸川

薏苡

末枯の薏苡よりぞ句も寂れ　八重櫻
子守子の唄や薏苡通しつゝ　梧月

蓼の花

淺川や舟膠して蓼の花　凍泉
洲に出づるありなしの道や蓼の花　赤山

秋の草

桐一葉子に答ふ

名もなきを唯秋草と知り給へ　鶴代女

木の實

一陣の金風に落つ木の實哉　驟雨
尚落ちて落ちある木の實芝移り　八重櫻

蕃椒

老の身の酒慎みや蕃椒　村家

茸

よき衣にべたりと泥や菌狩　梧月

朝顔

朝顔に冷水浴の盥かな　蝶羽

女郎花

女郎花蟷螂が居て淋しけれ　松濤樓

粟

提灯に露散る粟の小道かな　肋骨

木犀

木犀や離れ坐敷に針仕事　はつ女

鬼灯

鬼灯や静かに遊ぶ母の前　桐一葉

鳳仙花

實となるや山雀店の鳳仙花　八重櫻

龍膽　楢伐つて龍膽に日の匂ひけり　餘白

草紅葉　提灯の下照る草の紅葉かな　八重櫻

銀杏　禿山の谷に寺ある銀杏かな　村家

新米　新米ぢや新酒ぢや社建てるのぢや　潮月

西瓜　西瓜割る殘暑忘れの八つ時分　巨文星

蘆の花　花蘆や夕燒水に鰹の飛ぶ　梧月

稻　鳥居ありて宮尙遠し稻の花　桐一葉

桔梗　沙の上に温泉川の錆や桔梗咲く　鮫石

冬之部

天文

雪

塔の雪銀杏の枝に崩れけり　八重櫻

青天にたぐひ立ちけり雪の峰　同

上茂る楠に大雪積りけり　同

雪晴や鯛船出づる舟よばひ　同

敗き藁に粉雪吹きこむ厩かな　同

窓の戸にどうと當てるや雪丸げ　同

仕込み濟で塞ぐ酒倉雪靜か　同

魚賣や雪に立てたる荷ひ棒　梧月

水の上に拂ひ落すや苔の雪　同

會葬や提灯を置く雪の上　同

此原の森の長さや雪女　同

南天のさら〳〵動く粉雪かな　繞石

雪折れの竹に驚く夜道かな　二喬

鷄の餌に來る雀深雪かな　凍泉

釉の雪夜學の門に拂ひけり　蓮月

凩

閼の戸に焚く火明るし夜の雪　村雨
蒼海に甲板の雪の白さかな　松濤楼
いつ暮れて月となりたる雪野哉　京月
新臺に雪晴の旦登臨す　里静
草の戸の雪の深さや山風　子朗
妻見に雪の田映る床屋かな　煙山人
朝晴や雪を湯に焚く泊船　五城
南天の實かざす雪の鳥落し　香濤

凩や江深く白き鳥一つ　八重櫻
凩や千日行の果て勤め　同
凩や馬の敵の熊擊たん　同
凩の吹きやんで月峰にあり　嘲水
凩や雀の這入る臼の中　映紫樓
蓑の市凩吹いてありやなし　里静
凩や狼の眼の据ゑ所　木風
凩や酒に燃えたる舸子の胸　松濤樓

悼

凩に呼べど答もなかりけり　羽風
凩に錆つく錠や非常門　梧月

霰

山風に道の乾きや玉霰　八重櫻
出雲路や神去る宵の玉霰　同
北浦を廻る首途の霰かな　同
霰落つうつぼ柱の奈落かな　梧月
牛の息の下にころがる霰かな　同
水仙を剪りに出づれば霰かな　杉園
霰降る榛の木原の月夜かな　如翠
朱の宮の棚干に飛ぶ霰かな　沙汀
寒味噌を搗くは烈しき霰かな　四京
かゝる夜に山神祟る霰かな　嘲水

時雨

藤棚や藤の實枯れて初時雨　八重櫻
夕時雨網船汐に引かれけり　同
一揆等が旗を伏せたる時雨かな　同
しぐるゝや寺田といひて池のあり　同
番傘の主家今はなき時雨かな　禾水
風呂の戸に屢到る時雨かな　双湖
蘆刈つて沼の廣さや初時雨　三郷
塚の灯を盜む狐や小夜時雨　五呑
大澤の海とも見ゆる時雨かな　徐白
中押の碁となりぬれば時雨かな　桐一葉

霜

屏風岩表見晴れぬ霜風に　八重櫻
茨の實の紅うれし庭の霜　同
魚見櫓に揚げ代ふ旗や霜晴れて　同
菩提樹に霜の甍の高さかな　同
柚の梢蚯も飛ぶ見ゆ霜日和　同
辻蕎麥の火の粉立て居る霜夜かな　柳風
刺客傳讀めば骨鳴る霜夜かな　ゐの兒
小大工の霜踏み落す足場かな　梧月

冬日

砂よけの菰目をもるゝ冬日かな　八重櫻
冬日さす障子にひたと机かな　同
船室の窓の一つに冬日かな　同
堤高う青草見ゆる冬日影　同
鷄頭のあたまに殘る冬日かな　同
猫のつく流しの尻や冬日影　同
井出石に魚の鰭あり冬日影　梧月

冬

葬の一膳飯や冬降る　八重櫻
煤煙のこめし路次降る冬かな　同
積藻掻いて何食ふ犬や夕冬　同

綱繩を流せしあとに冬かな　同
貧巷の樹上鳶居り冬れけり　梧月
枯れて立つ薏苡に冬の聞かれけり　同

冬の月

新道や洲先も見ねて冬の月　八重櫻
鰤を釣る十里の沖や冬の月　同
柴がらみ薄き籬や冬の月　同
温室の花を照らすや冬の月　同
牧人に夢や無からん冬の月　桐一葉

北風

筵帆の數の子舟に北風かな　八重櫻
木賊食ふ馬北風に齒莖かな　同
北風や魚市に立つ筵旗　梧月
北風に叺干しけり極寺　同
北風や虎落の竹を吹き鳴らす　十峰

寒月

寒月や庭なき家の廣き脊戸　八重櫻
寒月や水汲み更かす酒仕込　同

冬の雨

冬の雨犀角を煮る匂ひかな　梧月

氷

小屋高く切り重ねたる氷かな　八重櫻
石切りの渡りそめたる氷かな　同
竪横と氷切り行く人數かな　同
湖と見ゆる氷の上に驛のあり　同
藍瓶の薄き氷や束ね綛　同
綠竹にさやけき朝の氷かな　里靜
岩窟に波の穗垂氷したりけり　同
芝山の前に池ある氷かな　ゐの兒
家の子の薬につり持つ氷かな　松濤樓
龜深く籠りて洞の氷かな　梧月

枯野

舟に似し車曳き行く枯野かな　八重櫻
川なくて堤殘りし枯野かな　同
北さして鵜渡る枯野かな　同
なま〳〵し草一むらや枯野原　同
我が家の竈にせまる枯野かな　同
馬繋ぐ枯野の家の軒低し　征帆
石碑のほとり松ある枯野かな　嘲水

荷ひ行く鹽のこぼるゝ枯野かな　笑堂
歸休兵枯野日和を通りけり　松濤樓

冬の川

土手下りて水際遠し冬の川　八重櫻
鷺一つ冬川尻の廣さかな　同
冬の川脊高き橋を渡りけり　梧月
贈の尖の石に當るや冬の川　同
日は西に冬川白き木立かな　繞石
冬川の底に鎭まる砂金かな　里靜
冬川や我が盆石にゆかりある　映紫樓

冬田

風に鳴る森を出づれば冬田かな　八重櫻
猪かりの火を焚く冬の山田かな　同
古社蔀の下の冬田かな　同

水涸

水涸の樋の口覗く鼬かな　驟雨

山眠る

火の脈は昔に絶ゑて山眠る　竹堂

冬の山

冬山に此の一村は日陰かな　笠亭

冬の海　冬の海入日の前に黑みけり　凸堂

時候

小春

藥賣島を退く舟小春かな　桐一葉
珍らしき都講の遊屐小春哉　同
松枯れて庵主小春に影も見ず　同
僧も見ゆ馬糶市の小春かな　同
猫の毛を拂ふ蒲團や小六月　梧月
糊を煮る鍋に小春の日脚かな　同
蠶豆の葉が頭のす小春かな　同
紺の香の立居にのかぬ小春かな　映紫樓
貸し揃ふ鍬八挺の小春かな　同

出雲大社

小春日の埃を拂ふ神馬かな　八重櫻
馬の目にも酒旗の照つたる小春かな　同

登山

大峯の空たのもしや小六月　活林
簑虫の浮世を覗く小春かな　一食
馬車に見る小春の富士や日本橋　繞石

小春日や桐の木買の畑に來る　潮月
家なきに畑ある島や小六月　葩琅
小春人庭に家鴨を秤りけり　梅窓居
山下りの牛を干しけり小春庭　ゐの兒
盆栽の櫻落葉や小六月　嘲水
小春日の高田の町や松子落つ　里靜
小春日や寺に參れば乳母に逢ふ　香濤
小春日や石吊り矯むる松の癖　朱屋樓

寒さ

狼の糞見て寒し碓氷越　梧月
佛壇の灯を消しに立つ寒さかな　同
大佛の膝許通る寒さかな　同
大寺の後ろに寒き我家かな　同
寒林に伐りある梢の匂ひけり　同
寺の水貰ふ筧の寒さかな　同
婆か來て我が心酌む寒さかな　八重櫻
薪くべて蟻の這ひ出る寒さかな　同

待戀

我春子にあらで門行く咳寒し　雪の舍

某僧出征

脫ぎすてし法衣を見るも寒さかな　嶺洞

公廷の溜りに一人寒さかな　來次
寺寒し庭の芭蕉の裂けてより　東籬
炭の香に心靜まる寒夜かな　桃里
水船へ鼬渡りし寒さかな　碧汀
衰へは龜の血を吸ふ寒さかな　水人
大江に一鳥飛ばぬ寒さかな　嵩南
雜懷に一路も得ざる寒さかな　映紫樓
風寒き大路を折れて小路かな　五城
二の峯へ來て海見ゆる寒さかな　喇水
暗愁は寒夜一凡に靠れけり　桐一葉

寒

禪林を出でゝ沙場や寒の雨　八重櫻
綿繰も寐てしまひけり寒の雨　同
寺の煤きのふに捨てぬ寒の雨　同
浦村に何の祭や寒の内　同
井の水の俄に減りぬ寒の内　同
小肴の串も佗しや寒の内　同
貧村に併搗く家や寒の内　同
切干の袋ゆたかや寒の内　同
落潮の雲の景色や寒の内　同
僅かなる芭蕉の心や寒の内　同

喪に籠る子路がやつれや寒の内　五城

短日

短日の波に暮るゝや鳥一つ　八重櫻
貰ひ忌する心にも日短き　同
薪採る水汲むこころ短かけれ　同
短日の墨目一筋挽く木かな　同
短日や強ゐて業餘の水三荷　同
短日や桶に浸せる鹽肴　驟雨

冴

冴ゆる灯の見にて石切る遠音かな　八重櫻
灯冴にて鍋釜夜を磨きけり　同
冴ゆる夜の今の飛脚は狐かな　神櫻
棋子冴にて策縱横に燈下かな　松濤樓
鷹据にし拳に冴ゆる野風かな　雌烏

冬の夜

月と雪と灯と冬の夜を照らす　八重櫻
風穴を閉づる呪文や宵の冬　同
冬の夜の戸を搔く犬を叱りけり　松濤樓
冬の夜の風飄々と廣間かな　梧月

冬至

雜炊に雜魚腥き冬至かな　八重櫻

湯豆腐に生薑の匂ふ冬至かな　同
山茶花の下に風呂焚く冬至かな　同
陰陽師算木を祭る冬至かな　一聲

春近

大皷小皷春に隣りけり　八重櫻
牧草の試植見に來ぬ春隣　同
にんにくに出來る頭や春近し　同
種蕪菁の二寸の春近き　同

冬の日

冬の日の馬行く影や砂川原　八重櫻
冬の日の飯食ふ中に暮れにけり　同
物干の蕭條として冬日かな　五尺

初冬

初冬や居間の壘の屏風疵　桐一葉
初冬やよき鶏放つ一軒家　梧月

凍る

金莖の甘露凍るや夜の殿　五城
蒟蒻の累々として凍りけり　同

大晦日

乾鮭の題句目出度し大晦日　八重櫻
竈の前大晦日の猫の居る　同

十月

十月の田の面に多き鴉かな　名川

凍つ

凍蜂や黄楊の日ざしに蘇る　梧月

冬ざれ

冬ざれのいつ盗まれし梯子哉　梧月

人事

梛

此の山に婆一人住む梛火かな　八重櫻
梛主が何荒み食ふ音高し　同
心地よや梛火四面を照らしけり　同
我を背める怪しき梛の焔かな　同
八十の翁に親あり梛の家　桐一葉
月日無き其業や梛の主　同
奈はれし女も古りぬ梛の宿　同
二繩の牛の賭事梛火かな　同
吊したる狸に梛の明りかな　湘碧
梛の火や戸に待つ馬の顔照らす　可呑
使する猿を伺ひけり梛の宿　柳風

榾の火に醉うて南柯の一夢かな　紫汀
身をそりて榾の煖きをたゝへけり　鐵笛
さし出でし邪魔を折りけり榾の足　梧月

埋火

埋火に串柿あぶる山居かな　八重櫻
埋火や木立の中の奈良の宿　同
埋火や山人の顔むづかしき　同
埋火や今日亦一人句三昧　同
埋火の宿や南椽冬櫻　同
灰かけば埋火菊の形かな　羽風

蒲團

蒲團敷く風に消ねたる灯かな　雪の舍
うんな事聞かじと蒲團かむりけり　驟雨
今日もある命に覺むる蒲團かな　佛丈
講人のざこねざこねる蒲團かな　里靜
隅々へ綿が遊びぬ解き蒲團　八重櫻

炬燵

詰絶ねて欠伸は移る炬燵かな　修竹
炬燵出て足に冷たき疊かな　二水
癖になる貧乏ゆるぎや置炬燵　八重櫻
卷紙をつぎ〳〵落す炬燵かな　梧月

湯婆

湯婆さめし海樓の夜の殘夢かな　八重櫻
ぬるき湯婆に眠る藥を飲みにけり　同
時知らず冷ねてわりなき湯婆かな　同
詩を誦して湯婆の冷ゆる忘れけり　羽風

網代

網代すや雪に宿りの窓の前　八重櫻
山下りて網代に住まふ翁かな　同
松原の入江靜けき網代かな　同
下つ江や網代の魚の稀々に　同

柊挿す

開くる戸に誰が柊を挿し添へし　八重櫻
柊をさすや厩の休め鞍　同
草の戸や鼠の贄の鰯さす　同
鰯さす門の柱の古びかな　飛白

冬籠

繪屏風の十二ヶ月や冬籠　梧月
猫白く烏府黑し冬籠　同
人知らずして慍らす君子冬籠　繞石
冬籠る大帝國の一爺かな　水人

煤掃

煤掃や鏡にかくる小風呂敷　佛丈
煤拂ふ玉の帚や紫宸殿　五城
煤掃いて草堂燈火輝けり　雪の舍
煤掃の塵や薬蘭の古綠　梧月

蕎麥刈

一鞍に蕎麥刈り負はす高さかな　八重櫻
高岡の蕎麥刈り餘す夕日かな　同
蕎麥刈るや百舌鳥高鳴す忘れ時　同

十夜

十夜寺庭木に下駄を吊しけり　櫻山
野平らに森の高さや十夜寺　松濤樓
お十夜の灯明き寺や雨の中　桐一葉

納豆

納豆賣子に欲しと思ふ子なりけり　四京
納豆や何も昔の此家の風　八重櫻
俳諧の獨法師や納豆汁　羽風

炭

炭刻ねて遲吟の人のかごとかな　雪の舍
塾僕の炭をくだくや梅が下　松濤樓
炭つけて來し馬見たし病床に　八重櫻

籔卷

山下の籔大がさに卷きにけり　八重櫻
卷籔もある郊外のさびれかな　同
籔卷きて山暖かに住む家かな　同

火鉢

佗ひ住みて閑を主とする火桶かな　八重櫻
三軒家古き火桶を出しけり　同
長火鉢苦吟の鼻をあぶりけり　羽風

藥喰

藥喰鼠障子をのぼるなり　鐵雄
戸をしめて人間遠し藥喰　鐵笛
藥喰襖の關の近きかな　桐一葉

爐

山道を圍爐裡の端へ下りにけり　八重櫻
圍爐裡火の細るに白し己が息　同
鶉燒く雨寒き夜の圍爐裡かな　神櫻

神樂

夜の雪神遷します神樂かな　八重櫻
廣前の海晴れやかや朝神樂　同

年貢

寂廡皆貢せしむる狠吏かな　八重櫻
貢米や五俵に量りべうもなき　同

狩　狩布令や冬木の中の筵旗　八重櫻
冬山に狩りし獣や牙長し　同

蕎麥湯　老が腹よつて柔ぐ蕎麥湯かな　梧月
禪林に狐きく夜の蕎麥湯かな　同

鉢叩　鉢の銘何と打ちしぞ鉢叩　水人
鉢叩く音や浮世の風の音　八重櫻

足袋　足袋の穴爪が世上を睨むかな　松濤樓
上紺の足袋はき出るや朝朗　八重櫻

玄猪　玄猪餅提けて名親を訪ふ日哉　八重櫻
煤壁や玄猪を祭る机の灯　梧月

鯛味噌　鯛味噌や世を捨て捨てぬ老俳士　松濤樓
鯛味噌に一輪匂へ庵の梅　同

卵酒　あれ聞けば千鳥なりけり卵子酒　八重櫻
卵酒陣中の冬ゆたかなり　同

冬構　藥垣の雨に匂ふや冬構　八重櫻
常燈の一基を中に冬構　同

春待　春待つや織かけ縞の派手よけれ　松濤樓
吊されて春待顔の瓢かな　梅窓居

狐狸宴會之圖

神の留守　徒らに過すべしやは神の留守　繞石

避寒　酒のよきに蜜柑の甘き避寒也　八重櫻

神の旅　散りかゝる紅葉や神の旅衣　雪江

狸汁　長能が風邪の藥や狸汁　梧月

衾　禁足の我に滿福な衾かな　八重櫻

懐爐　腹稿をあたゝめて居る懐爐哉　水人

神嘗祭　山茶花に新嘗祭の國旗かな　八重櫻

寒聲　寒聲や狐施行も過ぎて後　まつ女

厄拂　野槍に馬を上しぬ厄拂　八重櫻

紙衣　からびたる事嵐雪の紙衣かな　桐一葉

干菜　反古張りの窓に菜かけし小寺かな　雨村

札納　札納柊白き末社かな　笨堂

年忘　闇汁に腹のふくれも年忘　止蕉

火事　火事見舞大根漬を贈りけり　八重櫻

熊突　熊突や氷を渡る天鹽川　桐一葉

口切　口切の茶壺の側の手紙かな　八重櫻

年の市　鰤を中に物乎ひや年の市　梧月

べつたら市　枯菊の奈良やべつたら市の雨　八重櫻

蕪村忌　春星忌裏戸叩くは狐かな　牧星

煮凍　煮凍や妻がラムプの煤け樣　梧月

雪舟　鹿二匹雪舟を横切る谷路かな　餘白

麥蒔　城北は乏しき家や麥を蒔く　雲一朶

年送る　惟然坊簑着て年を送りけり　十峰

動物

千鳥　磯風のから田渡りや鳴く千鳥　八重櫻

島陰や夕晴澄みて飛ぶ千鳥　同

出る船の見送り岩や浦千鳥　同

浦に廣き工場あるや千鳥來る　同

夕月の川瀬によりし千鳥かな　同

陸暮れて海暮れ浪の千鳥かな　同

貯炭所を見る雪晴や島千鳥　同
海姫の貝投げうてば千鳥かな　桐一葉
網旦那酒呼ぶ千鳥磯風に　同
九十九里濱殘る紅葉に千鳥哉　同
味噌汁に千鳥鳴くなり漁休み　同
尻高な船相並ふ千鳥かな　雪江
濱湯屋の行燈赤し小夜千鳥　佛丈
舟風呂をぬく音たへて千鳥かな　梅窓居

河豚

河豚鍋の四方に起る焰かな　梧月
河豚汁文覺を知る一人あり　同
丈草をそゝのかし見ん河豚汁　笨堂
河豚の坐に君ある事の不思議かな　水紫
酒代に刀はなりて河豚汁　魚鱗
河豚食ひし口滄海にそゝぎけり　谿石
河豚食うてあしたなき世に遊びけり　松濤樓
此國に家ある浦や河豚を干す　八重櫻
閨汁に河豚現はるる謀反かな　桐一葉

水鳥

水鳥や日和のすはる島二つ　八重櫻
漁者の子の唄に浮寢の鳥ならん　同
浮寢鳥見に來る友や皆新知　同
水鳥の顔入れかゝる港かな　同
水鳥や網場定むる松が崎　同
魔風にや浮寢の鳥もなかりけり　同
水鳥や湖に臨める四つの驛　梧月

梟

椎の舍に水を汲む灯や梟鳴く　八重櫻
梟や水田明りの地藏森　同
長谷山の月夜鴉と梟かな　同
梟や參籠の夜の月もなし　双湖
梟や鴉にさらす韮の面　映紫樓

鴨

廣澤や御鴨獵の舟配り　八重櫻
鴨の聲茶畑はづれの沼明かな　同
物寂びて鴨飼ふ家や塔の下　同
鴨鳴くや暮れてゆく野の風明り　映紫樓

鴛鴦

鴛鴦や枯木の宿のかくし妻　活林
鴛鴦や長き橋ある廓町　梅窓居
出雲のや昔の水に鴛鴦の影　八重櫻

鮟鱇　鮟鱇の口ばかりなる話かな　繞石
風神の祭ある夜や鮟鱇鍋　神櫻

鷹　鷹狩の士を得て城に歸るかな　五城
鷹狩の威勢に戻す渡しかな　松濤樓

さゝ鳴　篁や霜の雫にさゝ鳴す　神櫻
さゝ鳴や法の灯白き朝の院　萊雨

冬の蠅　天井の河豚提灯や冬の蠅　梅窓居
冬の蠅鐵漿温むる爐邊かな　梧月

鷦鷯　八手葉の雪雫すやみうさゝゐ　八重櫻
積葉のずりこけてありみうさゝゐ　同

木兎　寺坂に提灯見ゐて木兎の聲　餘白
木兎は尾上に耳を立てにけり　八重櫻

海鼠　思ふ所なきにもあらぬ海鼠かな　水聲
帶落ちと見ゆる跡ある海鼠かな　八重櫻

狼　狼や枯篠にふる雨白し　村雨

牡蠣　牡蠣舟に襖がましき闇かな　桐一葉

鳴　痩山の水に映りて鳴　池水

鯨　闇汁に鯨と浮ぶ昆布かな　桐一葉

植物

落葉　裸湯に落葉除けかや戸一枚　八重櫻
牧草を刈り殘すあたり落葉哉　同
落葉して山人の絢ふは火繩かや　同
落葉朽葉置き煩ちふや句の姿　同
落葉掻いて土民移民の境かな　同
大佛も見ゐて林の落葉かな　桐一葉
沙の上に築島寺の落葉かな　同
病窓の日覆かげらふ落葉かな　同
落葉掻く翁日晴るゝ鶏も居て　同
鎌倉は畑の中の落葉かな　同

落葉して帚の如き一木かな　梧月
塵取に砂滯る落葉かな　同
烏府の底に熊野の落葉かな　同
立つ鹿や雨の落葉の尻につく　繞石
柿落葉梢佗びつゝ掃きにけり　五城
鐘樓見ゐて徑を埋む落葉かな　十峰
提げて行く擔桶の水漏る落葉哉　四京
門前に池ある寺の落葉かな　魚鱗
山の寂庭に迫りて散る葉かな　松静子
繩梯子落葉せし木にくたれけり　佛丈
山祇の宮に道なき落葉かな　竹似
寺坂の親石子石落葉かな　喇水
樋の水の何處へ漏れ去る落葉哉　波舍
犬が來て水のむ庭の落葉かな　朱屋樓

返花

師の喜怒も返花とて住み馴るゝ　桐一葉
返花里に移れば流言かな　同
掘り出しゝ鐘ある寺や返花　神櫻
病院はものゝ淋しや返花　去水
返花會式の庭にこぼれけり　十峰
耕すや植物園の返花　活林

櫻返り咲く下水や都鳥　禾水
詩に作り見る俗謠や返花　八重櫻
分け挿せばなきにかも似て返花　梧月

冬木

山祇石船据はる冬木かな　八重櫻
築き捨てし石垣ありて冬木哉　同
其中に日とる程の冬木かな　同
山の尾の道の直さや冬木立　同
草の戸の胡芋かけたる冬木哉　鶉居老
家解きしあとに淋しき冬木かな　玉一

枯菊

師の坊の病を枯るゝ黄菊哉　如翠
枯菊に四つの柱の小屋淋し　巨文星
枯菊も落葉焚く火に添へにけり　喇水
温泉の山を越すに家あり菊枯るゝ　牧星
枯菊に干す煎藥の袋かな　梧月

枇杷の花

枇杷咲くや炭屋の裏の山風　八重櫻
枇杷の花風の乾きにからびけり　同
塔の下に住み古る庵や枇杷の花　二一
古庭に鶏の餌箱や枇杷の花　魚鱗

蕪

僻陬に住みて蕪の句宗かな　八重櫻
我に蕪の句あれ共世に問はざりし　同
僧房や併も入れける蕪汁　杉雨
蕪畑や丘を崩し〻大うねり　梧月

冬の菊

海士が戸に砂の深さや冬の菊　八重櫻
庭石に咲きすがりけり冬の菊　同
冬菊も古松の塢下に愚庵かな　同
冬菊や漁村はづれの小家勝　牧星

枯蘆

枯蘆に火繩すてあり山の池　矮松
蘆枯れて汐に音ある夕かな　琴雨
荒砥積む舟枯蘆にかゝりけり　八重櫻

枯柳

分れ路の漁村も見にて枯柳　池水
柳枯れ水涸れ橋の高さかな　柿紅女
繩張りす道の潰えや枯柳　梧月

枯茨

穴に栖む地鳥の居るや茨枯れて　八重櫻
茨枯れて鍬へ移りし鵙かな　同
枯茨何鳥の巣か毀たれし　風聲

子規居士百日忌

水仙

水仙に追悼集を見る日かな　水聲
水仙や天地の赤き美女の幅　映紫樓

枯木

松柏の中に枯れたる銀杏かな　無風
青き鳥の網にかゝりぬ枯木立　梧月

山茶花

山茶花や障子の内の梭の音　池水
山茶花に投網つくらふ日南哉　翠影

茶の花

茶の花や庵に名釜の記を傳ふ　里静
茶の花に野寺へ砂の一路かな　二一

八手の花

世に古りし蘭醫の門や花八手　諷軒

枯芝

耳塚や風吹き荒れて芝枯るゝ　鐵笛

石蕗の花

忘れ井の蓋廣石や石蕗の花　村雨

枯薊

馬老いて沓もはかずよ枯薊　八重櫻

葱　置土に根深伏せけり船住居　村雨

枯芒　芒枯れて蛇の渡りし水もなし　八重櫻

○

雑　雲衲の句鈔に赤し冬の花　桐一葉

出し松に切りりけし塀や冬の家　梧月

碧雲集終

碧雲集附錄

作者一覽

いゐ部
あの兒　一巴　幽峯　一白
鷹嘴　一食　一聲　一喝
衣沙櫻　一石

ろ部
六花　蘆人　肋骨　綠葉
蹈村

は部
坡酔　破敵　白瓜郎　花の舍
梅鶯　白顆　はう女　葩水
梅窓居　葉櫻　葩琅　薄墨

に部
二水　二喬　二一

ほ部
箒堂　北浪　牧星　峰嵐

へ部
碧梧桐　米樹　碧汀　別天樓
碧帆

と部
凍泉　凸堂　毒佛　杜月
冬水　東雲　島洋　飛入
東離　東天紅　冬城　逝郷
枕水　竹堂　千鳥　池水

ち部
竹似

り部
柳風　柳村　柳下　柳盡

を部
笠亭里静梨東
乙字乙羽

わ部
矮松

か部
香骨滿好々可呑

よ部
鱶洲餘白

た部
稲心桃村桃里稲青

れ部
泰山宅野子
迷月嶺洞

う部
村家村雨双湖素波

つ部
鶴代女鳶紅葉

な部
波舍

ら部
蘿月萊雨藍青藍亭

む部
無風來次落水

う部
雨村雨水雲桂樓雲水

の部
能火羽風

く部
禾水活林郭公樓花心黄汀
黄秋活堂雲一朶

や部
八重櫻草の月草の影

ま部
まつ女

け部
月村螢雪硯田萱草
圭々月畠谿石蜆水
溪月桂州

ふ部
佛丈瓢軒富城文々庵
文魔風旋子風聲双葉
不外不冠不積

こ部
五城穀雨江村虹陽
虹風五呑孤幽古溪
五尺紅山紅星梧月

ゐ部
映紫樓葉村煙山人

て部
喇水蝶羽鐵雄天泉
潮月田士英天籟
鐵笛鐵骨

あ部
蛙房曙櫻山蛙聲

さ部
三角堂柴舟珊瑚城杉園
三郷杉雨草人西來
沙汀三遊亭

き部
虛子曲村巨文星葵雨
去水菫水京月魚鱗
行々子鏡湖玉玲瀧吟雪

ゆ部
雪の舍ゆかり
旭雲琴雨玉一玉流
菊村芹里桐一葉

め部
鳴雪明星名川

し部
神櫻十峰如翠湘碧
紫汀驟雨秀青鶉居老
嵩南春光四京薔薇
洲洋辛浪止鷺兒郎
秋汀師竹紫映柿村

ひ部
秋葉史好子朗四骨堂
修竹春童朱蜃樓春山
春城樵女雌鳥柿紅女
簾川飛白非都子

も部
木風默笑桃の戸

せ部
繞石井泉水靜處松濤樓
石鼎青瓢船山松軒
小皷雪江松聲征帆
井化松寳石村赤山
泉水松露松靜子淞洲
淞東子青斗

す部
水聲水人翠峰城水葉
翠影助二郎醉芳水紫

俳書堂書目

東京京橋區築地二丁目拾五番地

第一類　俳句入門研究書類

俳諧大要　子規先生著　定價金貳拾五錢　郵稅金四錢

俳人蕪村　子規先生著　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

俳句問答　子規先生著　上下全二冊　每冊金廿五錢宛　郵稅每冊四錢宛

俳諧馬の糞　虛子先生俳話　定價金八拾錢　郵稅金八錢

明治の俳風　中村樂天君著　定價金參拾八錢　郵稅金六錢

俳句の研究　俳書堂編　定價壹圓五拾錢　郵稅金拾四錢

第二類　蕪村俳句全書　全部九冊特價送本料共金二圓五十錢

蕪村句集講義　子規鳴雪碧梧桐虛子全九冊　蕪村俳句全書第一二三四篇　每冊金廿五錢宛　郵稅每冊六錢宛

蕪村遺稿講義　鳴雪碧梧桐虛子輪全講四冊　蕪村俳句全書第五六七八篇　每冊金廿五錢宛　郵稅每冊四錢宛

類題蕪村全集　（索引一俳書堂編講義）蕪村俳句全集第九篇　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

第三類　句集、連句、季寄セ

春夏秋冬　子規碧梧桐虛子先生共選　春夏秋冬全四冊　每冊金廿五錢宛　郵稅每冊四錢宛

續春夏秋冬　碧梧桐先生選篤山不折蕭　春夏秋冬全四冊　每冊金廿五錢宛　郵稅每冊四錢宛

新春夏秋冬　東洋城君選樂堂君表紙　全四冊（春夏既刊）　每冊金廿五錢宛　郵稅每冊六錢宛

子規句集　碧梧桐、虛子共編　子規遺稿第五篇　定價金參拾錢　郵稅金六錢

鳴雪句集　鳴雪翁著　定價金參拾錢　郵稅金三錢

蘚三醉句集　虛子三允兩君序　アラレ叢書第一篇　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

柑子句集　叙山柑子君著　俳書堂文庫第拾二拾三篇　定價金貳拾錢　郵税金六錢

玉珂冥々句集　俳書堂編　俳書堂文庫第拾、拾壱篇　定價金貳拾錢　郵税金四錢

女俳家句集　佐藤滴泉君遺著　俳書堂文庫第拾四拾五篇　定價金壱拾錢　郵税金四錢

佛門俳句集　良清盆化共編　句佛上人題句　定價金壱拾錢　郵税金六錢

醫藥疾患句集　小池晩人君編　俳書堂文庫第六、七篇　定價金貳拾錢　郵税金四錢

連句名作　田山耕村君編（全二冊）　俳書堂主人編　俳書堂文庫第三四篇　定價金貳拾錢　郵税金四錢

連句作例　俳書堂主人編　俳書堂文庫第五編　定價金拾錢　郵税金貳錢

神珍　俳句季寄せ　李寄せを兼ねたる　俳書堂編　定價金拾錢　郵税金貳錢

新修歳時記　中谷無涯師編　全四冊（冬、夏既刊）　一冊壱圓壱拾錢　一冊小包料八錢

第四類　文集、小説

子規書簡集　高浜虚子先生編　子規遺稿第四篇（全二冊）　毎冊金八拾五錢　郵税毎冊八錢宛

寫生文集　帆立貝　坂本四方太先生共著　高浜虚子先生共著　定價金壱圓　郵税金拾貳錢

新因人　寒川鼠骨君著　入獄實記　定價金壱拾五錢　郵税金六錢

子規小説集　高浜虚子先生編　子規遺稿第三篇　定價金貳拾五錢　郵税金四錢

千代紙　夏目漱石先生序　鈴木三重吉君作　定價金七拾五錢　郵税金六錢

石寶　小説　子規先生像　川崎安民先生製作　賣價金九拾五錢　學包料金拾貳錢

御短冊色紙畫帖各種

（振替貯金東京二四一七番）　俳書堂

文房具
諸紙類
諸染料

松江市末次本町
織原商店
（電話三四番）

製筆

松江市亀町
裏辻耕文堂

活版印刷
帳簿製本

松江市殿町
蒲生善之助
（電話二〇四番）

文房具
美術小間物
化粧品
舶來雜貨

松江市殿町
和田双湖堂
（電話三〇三番）

柑子句集　叔山柑子君著　俳書堂文庫第拾二拾三篇　定價金貳拾錢　郵稅金六錢

玉珂冥々句集　俳書堂編　俳書堂文庫第拾、拾壹篇　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

女俳家句集　佐藤滴泉君遺著　俳書堂文庫第拾四拾五篇　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

佛門俳句集　夜濤金化共編　句佛上人題句　定價金壹拾錢　郵稅金六錢

醫藥疾患句集　小池晩人君編　俳書堂文庫第六、七篇　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

連句名作　田山耕村君編（全二冊）　俳書堂文庫第三四篇　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

連句作例　俳書堂主人編　俳書堂文庫第五編　定價金拾錢　郵稅金貳錢

俳句季寄せ　（季寄せと成れば下ろる）　俳書堂編　定價金拾貳錢　郵稅金貳錢

新修俳諧手帳　俳書堂編　定價金拾貳錢　郵稅金貳錢

歲時記　中谷無涯師編　全四冊（冬、夏既刊）　一冊壹圓壹拾錢　一冊小包料八錢

第四類　文集、小說

子規書簡集　高濱虛子先生編　子規遺稿第四篇（全二冊）　每冊金八拾五錢　郵稅每冊八錢宛

立貝人　坂本四方太先生共著　高濱虛子先生編　定價金壹拾貳錢　郵稅金壹錢

新囚人　寒川鼠骨君著　入獄實記　定價金壹拾五錢　郵稅金六錢

子規小說集　高濱虛子先生編　子規遺稿第三篇　定價金貳拾五錢　郵稅金四錢

千代紙　（小型）　夏目漱石先生共著　鈴木三重吉君作　定價金壹拾五錢　郵稅金六錢

子規先生像　（石膏）　川崎安民先生製作　實價金九拾五錢　郵包料金拾貳錢

御短冊色紙畫帖各種

（振替東京二四一七番貯金）

俳書堂

文房具
諸紙類
諸染料
松江市末次本町
織原商店
（電話三四番）

製筆
松江市末次町
裏辻耕文堂

活版印刷
帳簿製本
松江市殿町
蒲生善之助
（電話二〇四番）

文房具
美術小間物
化粧品
舶來雜貨
松江市殿町
和田双湖堂
（電話三〇三番）

石版
印刷
松江市北堀城見畷
小川石版印刷所

金銀
細工
松江市片原
村田寛一郎

書籍
雜誌
樂器
松江市末次本町
有田書店
（電話三三五番）

活版印刷
書籍製本
松江市殿町
報光社

碧雲集特價賣捌

出雲國松江市殿町　報光社

碧雲集は其句の峻嚴なる選拔と其印刷製本上の精巧なるとによりて俳壇に歡迎せられたるは本社の光榮とする所に御座候本集の骨子は中國及四國にありと雖も其實關西唯一の句集たるは喋々を要せず隨て購讀者は全國並滿韓に涉り出版豫定部數を超過する數百に及べり就いては本集配本後更に俳人各位の購讀を希望せらるるものあるべきを期し玆に壹百部を限り豫約者同樣特別減額四十五錢（外郵稅六錢）にて御需に應ずる事と致候間左記賣捌所へ急速御申込被下度候一百部賣切の曉は斷然定價に復すべく候

賣捌所
出雲國松江市末次本町
有田書店
東京京橋區築地二丁目
俳書堂

石版印刷
松江市北堀城見畷
小川石版印刷所

金銀細工
松江市片原
村田寛一郎

書籍雜誌樂器
松江市末次本町
有田書店
（電話三三五番）

活版印刷
書籍製本
松江市殿町
報光社

碧雲集特價賣捌

出雲國松江市殿町　報光社

碧雲集は其句の峻嚴なる選拔と其印刷製本上の精巧なるとによりて俳壇に歡迎せられたるは本社の光榮とする所に御座候本集の骨子は中國及四國にありと雖も其實關西唯一の句集たるは喋々を要せず隨て購讀者は全國並滿韓に渉り出版豫定部數を超過する數百に及べり就いては本集配本後更に俳人各位の購讀を希望せらるるものあるべきを期し玆に壹百部を限り豫約者同樣特別減額四十五錢（外郵稅六錢）にて御需に應ずる事と致候間左記賣捌所へ急速御申込被下度候一百部賣切の曉は斷然定價に復すべく候

賣捌所

出雲國松江市末次本町
有田書店

東京京橋區築地二丁目
俳書堂

260
568

明治四十二年十二月十三日印刷
明治四十二年十二月十八日發行

定價金六拾五錢

出雲國松江市南田百四十八番地
編纂者　碧雲會

出雲國松江市灘町十三番地
發行者　山村榮之助

出雲國松江市殿町八十七番地
印刷所　報光社

出雲國八束郡川津村大字西川津百五番地
印刷者　前田得一

出雲國松江市末次本町
賣捌所　有田書店

東京市京橋區築地二丁目
同　俳書堂

（不許複製）

北京圖書館藏